

ベルギーの囲郭都市プランとその変容に関する予察 ——ベネルクス囲郭都市研究 (2) ——

戸 祭 由美夫*

Preliminary Note on the Castle Towns in Belgium

TOMATSURI Yumio*

[要旨] ベネルクス囲郭都市研究という目的に沿って、オランダを対象に囲郭都市・集落の分布と変容を予察した前稿に引き続いて、本稿ではベルギーを対象に、その囲郭集落ないし囲郭都市プランの成立と分布の特徴を概観した上で、ベルギー国内を 3 地域に区分して、各地域の代表的な囲郭集落 (都市) としてブリュッヘ、ルーヴェン、リエージュ、マリアンブール、フィリップヴィルをとりあげ、各種の地図資料や現地踏査をもとにその特徴を明らかにした。

[キーワード] ベネルクス囲郭都市研究, 囲郭集落, 都市プラン, ベルギー, ブリュッヘ, ルーヴェン, リエージュ, マリアンブール, フィリップヴィル

目 次

- | | |
|------------------------|----------------------------------|
| I. 本稿の意図 | 1. 低湿なベルギー北西部における囲郭都市：ブリュッヘ |
| II. ベルギーの囲郭集落に関する資料 | |
| III. ベルギーにおける囲郭集落の成立過程 | 2. 緩やかな起伏のベルギー中央部における囲郭都市：ルーヴェン |
| 1. ベルギーの地理的概要 | |
| 2. 囲郭集落の発生過程 | 3. アルデンヌ高原とムーズ河谷からなるベルギー南東部の囲郭都市 |
| 3. 近代における囲郭集落の分布 | (リエージュ, マリアンブール, フィリップヴィル) |
| IV. ベルギーの囲郭集落の地域的類型 | |
| | V. 今後の研究へ向けての課題 |

I. 本稿の意図

筆者は、既に、「ベネルクス囲郭都市研究」の第 1 ステップとして、「オランダの囲郭都市プランとその変容に関する予察」と題する拙稿をまとめた (以下、前稿と称す) ¹⁾。そこ

*奈良女子大学文学部; Faculty of Letters, Nara Women's University

では、日本の城郭のなかで形態上特異な存在である五稜郭に着目し、方形の囲壁・環濠と5つの稜堡をもつその囲郭プランが、西洋の兵学書に由来するとされることから、まず前篇で、近世日本における唯一の西洋文明の窓口だったオランダにおいて、五稜郭に類似する囲郭都市プランが、いつごろ、どのような要因で発生し、いかにその要塞システムを発展させていったのか、かかる囲郭集落は当時のオランダでいかなる分布をしていたのか、さらに今日では形態や機能の点でいかなる変容を遂げているのか、といった点について概観した。ついで後篇では、かかる概観の上にたって、囲郭の規模・形態・成立事情などの点で各々異なるものの今日までの変容の程度が少ない4つの囲郭都市——ユトレヒト・レイデン・デヴェンテル・クーヴォルデン——をとりあげ、既往の研究文献や各種の地図資料、さらには現地踏査などをもとに、囲郭の成立と変容をできるだけ具体的に示した。また、筆者を代表者とする文部省科研報告書において、それら前篇・後篇を補訂して再録するとともに、クーヴォルデンと同様のルネサンス様式の計画的囲郭集落たるウィレムスタットについても、地形図・空中写真をもちいて、その囲郭の成立と変容を簡単ながら具体的に説明しておいた²⁾。

ところで、日本の近世たる16世紀末から18世紀後期は、オランダの独立からベルギーの分離独立にいたる近代国家成立期にあたっており、政治・経済・文化のいずれの面でもネルクス諸国にとって極めて重要な時代であったといえる。したがって、本稿ではベルギーを対象として、その囲郭集落ないし囲郭都市プランの成立と分布、および現代に至る形態・機能の変容について、予察的に論じてみたい。具体的には、資料上の制約も考慮して、a) 全般的な概観に引き続いて、b) 近代、とりわけ18世紀後期におけるベルギー全域の囲郭集落の分布状況を考察する。ついで、c) ベルギー国内を3地域に区分して、各地域ごとに代表的な囲郭集落(都市)をとりあげ、各種の地図資料や現地踏査をもとにその特徴を明らかにしてみたい。

II. ベルギーの囲郭集落に関する資料

前稿では、オランダの囲郭集落全般を把握しうる資料として、次のa)～d)の4種を挙げた。

- a) 都市史に関する研究文献
- b) 地形図・空中写真を集成した地図帳
- c) 主要都市の市街地拡大過程に関する研究成果を纏めた地図
- d) 主要都市・集落の古地図を集成した古地図集

一方ベルギーの場合、よく似た近代史を辿っているものの、入手可能な資料の種類という面から言えば、かなり異なった状況にあるといえよう。これは、筆者の研究調査が「何はともあれ現地に触れること」をモットーにしたため、文献資料の収集ないし資料の情報収集が不十分であることにも因ろうが、古地図・地形図の出版状況がオランダとベルギーで大きく異なっていることにも大きな原因がある。つまり、オランダでは地形図・古地図を扱う出版社がそれらを集成した地図帳ないし古地図集の形で市販しているのに対して、ベルギーではベルギー国土地理院から多種多様な古地図・地形図がばら売りの形で刊行されている³⁾。そこで本稿では、かかるベルギーの事情を勘案して、圏郭集落に関して以下のような資料を利用することにした。

[都市史に関する研究文献] ベルギー諸都市の都市史を概観する基本的文献として、H. ピレンヌの諸著作をまず挙げるべきであろう⁴⁾。しかし、都市圏郭を歴史地理学の視点から扱う本稿にあっては、より重要な研究文献として次の文献Aおよび文献Bを利用することにした。

文献A：E.A.Gutkind："*Urban Development in Western Europe : France and Belgium*" (*International History of Urban Development* vol. 5), 1970, The Free Press, New York, pp.289~467.

文献B："*Communes de Belgique — dictionnaire d'histoire et de géographie administrative*". 1981・83, Crédit Communal de Belgique (全4冊)⁵⁾。

このうち文献Aは、よく知られているように、多様な図・写真を豊富に載せつつ、世界的な視野からベルギーの都市史を概観するとともに、個別の都市史に多くのページ数を割いており、前稿の場合も上記a)の研究文献の中に同じシリーズの一冊を挙げた。一方文献Bは、ベルギーの全ての地方自治体に関する要を得た歴史・地理ハンドブックとも言うべき4冊セットの大部な書物である。

[古地図・地形図] 前述のように、ベルギー国土地理院では、作成者・作成機関・作成目的・作図時期・図式・縮尺などを異にする各種のオリジナルな古地図・地形図を現在も販売している。本稿ではそれらの地図類のうち、内容・測図年代・縮尺などを勘案して、次の資料A～資料Fの6種類を利用することにした。

資料A：Atlas des Villes de la Belgique au XVIe Siècle 1：7500

資料B：Carte de la Cabinet des Pays-bas Autrichiens (1770-1777年) 1：11520

資料C：Carte Chorographique des Pays-bas Autrichiens(1780年) 1：86400

資料D：Carte Topographique de la Belgique (1846-1854年) 1：20000

資料E：Carte Topographique de la Belgique ed.3 (1930年) 1：20000

資料F：Carte Topographique a 1：20000, 1：10000, 1：25000 (1980～90年代)

このうち、資料Aは、スペイン王フェリッペ2世が1558年に行政・軍事目的でヤコブ＝ファン＝デヴェンテルに命じて作成させたネーデルランド17州のカラー都市図のうち、現

在ベルギーの国土地理院が保管する図面の複製である⁶⁾。また、資料Bは、当時のオーストリア・ハプスブルク家領内のカラー測量図のうち、同院が保管する図面のモノクロ複製である。資料D~Fは同院ないしその前身の軍測量機関の測図になる地形図で、図式的にも違いがある⁷⁾。

[空中写真] さらに、空中写真測量でも先進国であるベルギーでは、第二次大戦以前撮影の空中写真も市販されているが、本稿の資料としては最近撮影（1980年代後半~90年代前半）の縮尺1：20000-21000（密着）のものを利用することにした⁸⁾。

以上、全般にわたっては上記の文献・資料を利用し、さらに囲郭集落個々の記述に関する箇所でも個別的研究成果ないし資料類を参照しうる場合には、当然ながらそれらも引用・利用することとする。

III. ベルギーにおける囲郭集落の成立過程

1. ベルギーの地理的概要（図1参照）

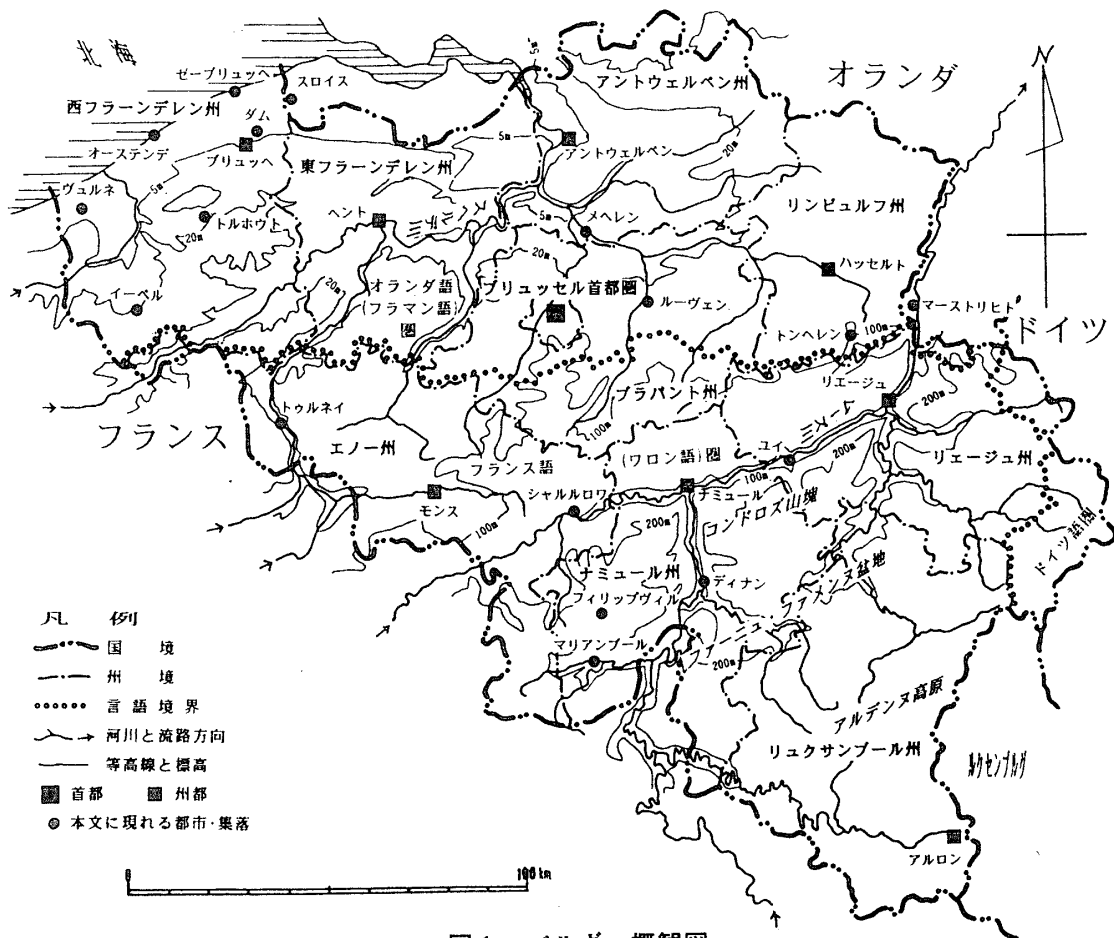


図1 ベルギー概観図

ベルギー（正式にはベルギー王国）は、面積約3万平方キロ、人口約1千万人で、西フランダレン（West-Vlaanderen）、東フランダレン（Oost-Vlaanderen）、アントウェルペン（Antwerpen）、リンビュルフ（Limburg）、ブラバント（Brabant）、エノー（Hainaut）、ナミュール（Namur）、リュクサンブール（Luxembourg）、リエージュ（Liège）の9州からなっている⁹⁾。

自然環境の面からみれば、全域が西岸海洋性気候のもとにあり、地形・地質条件から、a) アルデンヌ高原とムーズ河谷、b) ゆるやかな丘陵性の平野、c) 北海沿岸部の低地に3分される¹⁰⁾。ベネルクス3国と総称されることから、オランダと似た自然環境をもつと考えられやすいが、オランダでは上記区分のc)に該当する低地が国の過半を占めており、上記a)に該当するような丘陵・高原部はオランダにはない。a) やb) の点からみれば、北フランスに似ており、北フランス的な地域とオランダ的な地域との漸移地帯というのが適当かも知れない。なお、南東隣のルクセンブルグは国土の全てがa)に該当する。

上述のような北フランスとオランダとの漸移地帯としての性格は、自然環境よりも文化的な面で一層明確となる。すなわち宗教・言語面で、ベルギーはオランダ系の北部と北フランス系の南部に明瞭に2分される。そもそも、ベルギーがオランダから1831年に分離独立した最大の理由は宗教の相違、すなわちオランダがプロテスタントであるのに対してベルギーはカソリックであることであった¹¹⁾。しかし、今日では言語に関する地域的相違がより深刻であって、北半部はオランダ語圏（フラマン語）に、南半部はフランス語圏（ワロン語）にそれぞれ属しており、ベルギー語と称すべきこの国独自の言語はない。かかる文化面での南北対立は、独立後も、政治・経済面でのバランスの変化とともにますます激化し、統一国家の維持という点で大きな問題となった。さらに、第一次世界大戦後にドイツから割譲された地域ではドイツ語が使用されており、一層問題を複雑にさせた。そのため、1970年の憲法改正以降、地方分権の強化を柱とする地域均衡政策が推し進められ、1993年の憲法改正により、ベルギーは2文化共同体・3地域共同体からなる連邦制の王国となった。その体制を図式化すれば表1のようになる¹²⁾。

表1 ベルギーの使用言語・文化共同体・地域共同体

[使用言語]	[文化共同体]	[地域共同体]
オランダ語（フラマン語）	フランダレン	フランダレン
		ブリュッセル首都圏
フランス語（ワロン語）	ワロニー	ワロニー
ドイツ語		

2. 囲郭集落の発生過程¹³⁾

ベルギーは紀元前1世紀にローマ帝国の版図にはいり、ローマンロードの幹線ルートが東西に走ったが、当時の囲郭集落の中で、キヴィタスの中心地となったトンヘレン (Tongeren) とトゥルネイ (Tournai) のみが、地域中心としての性格を備えていた。ローマの防衛線が崩れ、フランク族のサリ支族がベルギー全土に進出してくると、トンヘレンは破壊され、わずかにトゥルネイのみがサリ支族の建てたメロヴィング王国の初期の王宮所在地として中心集落の地位を維持し続けた。

9世紀にノルマン人の侵入を受けると、各地の封建領主や司教によって、従来の領主館よりも防御機能を強化した城砦が建設された¹⁴⁾ (例えば、リエージュ・ブリュッヘ (Brugge) ・ヘント (Gent) ・トゥルネイなど)。この城砦は長方形の囲壁からなっており、濠に取り巻かれていて、一般には小規模 (1～5 ha) で原始的であったが、住民の避難所として十分な収容力を備えていた。囲壁の内部には領主の居館や役所や商店などがあり、大抵の場合、周辺農村の中心地をなしていた。かかる原初的な中心地機能を備えた城砦が10世紀に発達しはじめ、ついには避難所としての機能を無くして、都市的共同体の興隆に不可欠な都市核となった。

11世紀頃には、はやくもベルギー東部のリエージュ・ナミュール・ユイ (Huy) ・ディナン (Dinant) などが、ムーズ川沿いの交通の要衝に立地することから商工業集落として繁栄した。一方、ベルギー西部のフラーンデレンやブラバントの各地では、封建領主が自らの所領支配を強化する目的で、城砦の麓に商工業集落を形成・拡張したり、城館と関係なく新しい商工業集落を創立したりしたようになった。前者の例としてヘント・ブリュッヘ・ブリュッセル・ルーヴェン (Leuven) などがあり、後者の例としてトルhout (Torchout) ・イーペル (Ieper) ・メーセン (Mesen) が挙げられる。かかる2種の商工業集落に居住する商人と手工業者は明瞭に都市的性格を呈し、相互援助と相互防衛を誓ってギルドないしハンザという名の組合を結成し、ギルド会館の建設や商工業集落を取り巻く防備施設の築造をするようになる。歴代のフランドル伯をはじめとする封建諸侯も、自らの利害と合致するために、かかる非公式の自治組織を庇護し、諸特権を付与するようになる。かくして12世紀以降、諸特権を法的に認められ、囲郭などの防御施設を備えた都市がベルギー西部の各地に誕生し、アントウェルペン・ルーヴェン・メヘレン (Mechelen) ・ブリュッヘ・イーペル・ヘント・ブリュッセルといった都市が大いに発展を遂げた。なかでも、ヘントとイーペルは毛織物工業で栄え、ブリュッヘが北ヨーロッパ最大の貿易港に発展したため、ケルン～マーストリヒト～ルーヴェン～ブリュッセル～ヘント～ブリュッヘ間の交通路も商業交易ルートとして大いに賑わった。

3. 近代における囲郭集落の分布

現在のベルギーの範囲は中世にはフランドル・ブラバント・ナミュール・エーノー・ルクセンブルク・リエージュなどの封建諸侯領に別れていたが、14世紀からブルゴーニュ公領に統合されていき、さらにハプスブルク家領に組み込まれてしまう¹⁵⁾。その統治がカトリックの擁護を政策として強く打ち出していったことから、ネーデルランド（オランダ）独立戦争が起こるのであるが、その直前の時期に資料Aのカラー都市図集がヤコブ＝ファン＝デヴェンテルによって作成される。その総数は212、うちベルギー国内分が68に達する。ただ、この都市図に描かれた集落の全てが囲郭を備えた都市であったというわけではないし、逆に、ハプスブルク家領に属さないリエージュ司教領などの封建所領支配下の諸都市は対象から外されている。そこで、この都市図集とほぼ同時代に作成・編集されたブラウン＝ホーヘンベルフの都市図帳¹⁶⁾に描かれたベルギーの23都市を調べてみると、両者に共通して描かれているのはオーステンデ（Oostende）・ブリュッヘ・ヘント・アールスト（Aalst）・リール・メヘレン・ブリュッセル・ルーヴェン・ティエネン（Tienen）・トゥル

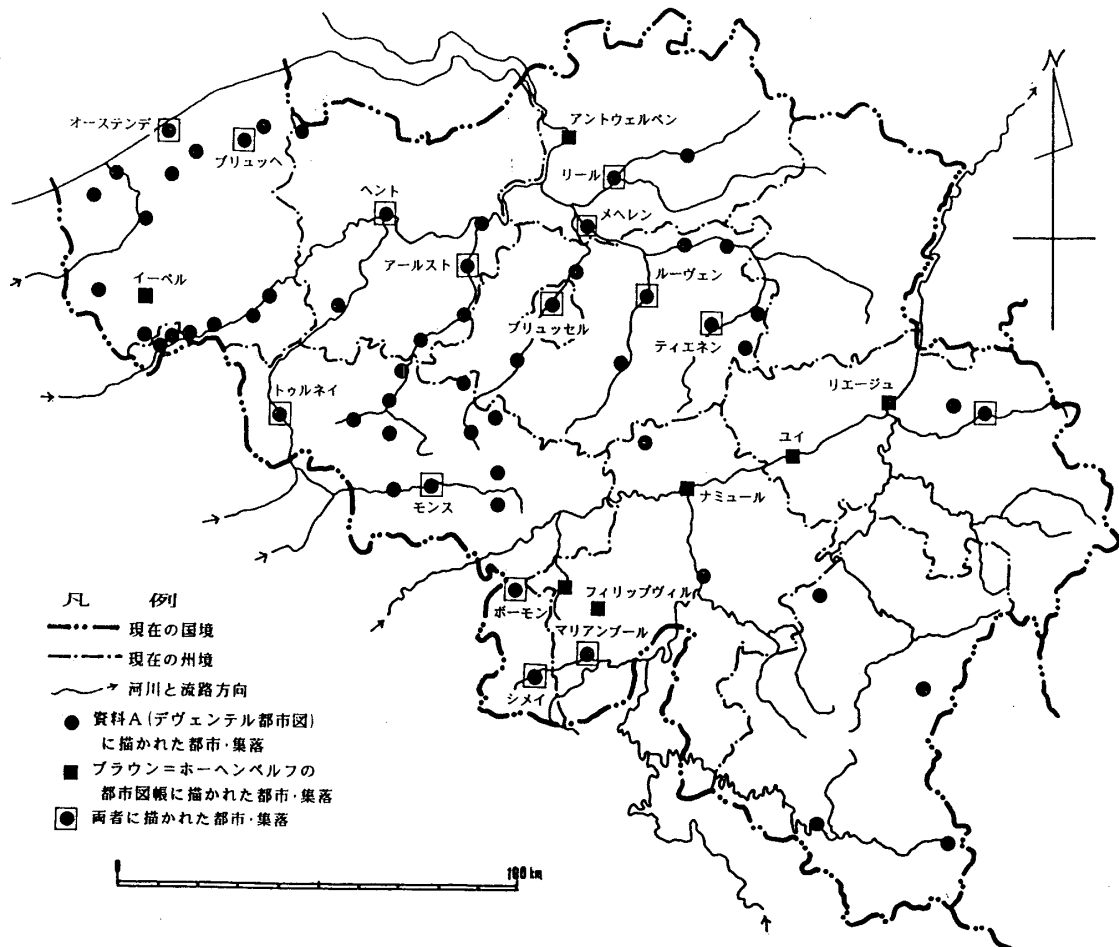


図2 16世紀後半～17世紀前半におけるベルギーの都市的集落の分布
ヤコブ＝ファン＝デヴェンテルの都市図集（資料A）とブラウン＝ホーヘンベルフの都市図帳を資料として

ネイ・モンズ (Mons)・ボーモン (Beaumont)・シメイ (Cimay)・マリアンブール (Mariembourg)・ランブール (Limbourg) の15都市で、アントウェルペン・イーペル・リエージュ・ユイ・ナミュール・フィリップヴィル (Philippeville) など8都市はブラウン＝ホーヘンベルフの都市図帳にのみ描かれている (図2参照)。

ところで、この都市図集と都市図帳にの両方ないしいずれか一方に描かれている76の都市 (ないし集落) がどのような防御設備を施されていたかという点、都市図帳に描かれた都市に関しては、ヘントを除く全てに囲郭が見られる。都市図集の場合、残念ながら未だ68全てを十分検討できる段階にないが、多くは当時既に囲郭を備えていたと推測される¹⁷⁾。その囲郭も、a) 旧来の簡単な石造の囲壁が周濠の内側に施されているものばかりでなく、b) 当時としては最新の強固な要塞システムを施したものや、c) 当時流行の斬新なルネサンス式計画的囲郭集落をなすものもあった¹⁸⁾。a) の例としてはブリュッヘ (第4章第1節参照)・ルーヴェン (第4章第2節参照)・リエージュ (第4章第3節参照) を、b) の例としてはアントウェルペン・オーステンデを、c) の例としてはフィリップヴィル・マリアンブール (ともに第4章第3節参照) を挙げるができる。

ベルギーはその後、独立志向のネーデルランド諸州同盟側から離脱してハプスブルグ家領ネーデルランドへ復帰し、支配者もスペイン王から1713年にオーストリア＝ハプスブルグ家が変わった。

その間、ブリュッヘからベルギー最大の商工業都市の地位を引き継いだアントウェルペンもスペイン王の支配政策の影響で没落に向かい、オランダが独立して「黄金の十七世紀」を迎えるのと対照的に、ベルギーの経済的地位は相対的に低下していった。そして、オーステンデを新たな積出し港とすることで、フランデレン地方の都市はなお優位に立っていたものの、中世的なギルドの束縛の弱いワロン地方がかつての力を盛り返していった。

1770年から1780年にかけて作成された資料Bと資料Cは、ナポレオン出現直前のオーストリア領ベルギーの状況を示している。このうち資料Cはベルギー全図1葉と縮尺約1:86400の割り図ほかからなっており¹⁹⁾、集落の形態と規模を表現するために、囲郭の有無をもとに次のような区分を設けている²⁰⁾。

a) 囲郭都市 b) 囲壁都市 c) 市場町 d) 要塞 e) 大村 f) 村

このような集落表現は本稿の趣旨に極めて適っており、この資料Cを以て当時の囲郭都市と囲壁都市の分布を図化すると図3のようになる。この図では資料Cに記された隣接国の要塞都市・囲壁都市の分布もわかるので、アントウェルペン以西のフランデレンとオランダのゼーラント州との国境沿い、およびベルギーとフランスとの国境沿いに、防御施設を強化した諸都市が高い密度で分布していたことが知られる。

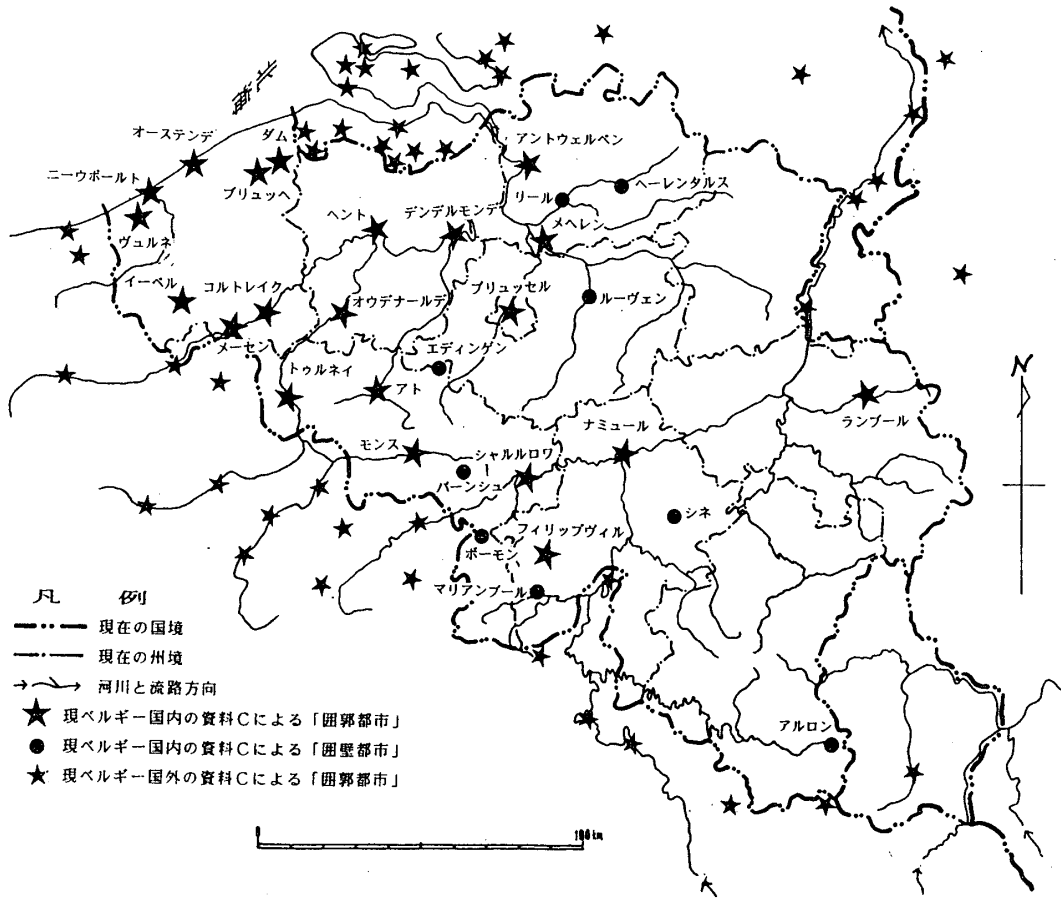


図3 資料Cにみる18世紀後期ベルギーにおける圍郭都市・圍壁都市の分布

資料Cで圍郭都市ないし圍壁都市として表現された都市を、資料Cより約8倍も大縮尺の資料Bによって検討してみると²¹⁾、各都市の防御施設の様相が一層明確に把握できる。ただしここでは、以下の第4～5章でふれる都市については重複を避け、ブリュッセル近郊の小規模な圍郭集落たるダム(Damme)²²⁾が資料Cおよび資料Bでどのように表現されているかを図4に示しておくにとどめる。

ベルギーではナポレオン戦争後の1831年にオランダからの独立が認められ、産業革命の波及・伸展の中で、首都ブリュッセルを初め、多くの都市で人口が増加し、近代都市として発展していく。特に南部のワロン地方の石炭資源を活用して、リエージュ・シャルルロワ(Charleroi)などムーズ川沿いの河港がベルギーの国力増大に寄与することになる。この傾向は石炭産業の斜陽化とともに変化し、現在では中北部のフランデレン・ブラバント地方の商工業都市の力が相対的に高い。

その間、都市の防衛施設たる圍壁や周濠はその役割を終えたとして徐々に取払い・取崩され、あるいは埋立てられていった。もちろん、ドイツ・フランスという強国に挟まれ、2度の世界大戦などでやむなく防御施設を一時的に強化したことはあったが²³⁾、現在では

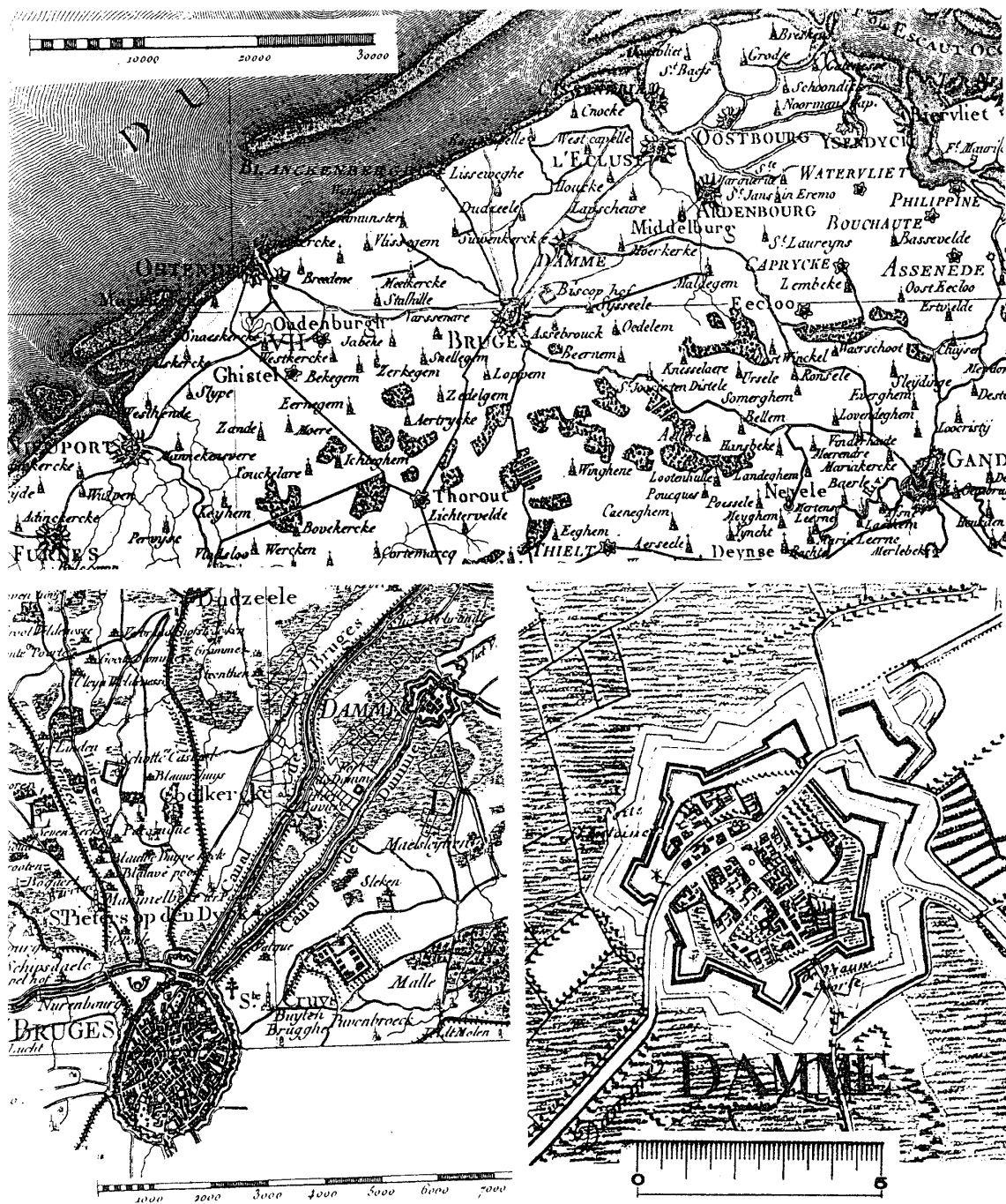


図4 資料Bと資料Cにみる1770年代のダム <©IGN, Belgie>

上：資料Cの総図 (No. XXII)

左下：資料Cの地方図 (No. II)

右下：資料B (図幅名・番号や縮尺に関する記載なし)

多くの都市で囲郭は環状の幹線道路に変わったり、運河として機能したりしている。

そこで次章では、いくつかの代表的な囲郭都市を取り上げて、囲郭の変遷を具体的にたどってみたい。

IV. ベルギーの囲郭集落の地域的類型

ベルギーは、地形・地質条件といった自然環境面から地域区分すると、第3章第1節に記すごとく、北西部・中央部・南東部の3地域に区分される。本章では、これら3地域ごとに、図3の囲郭都市ないし囲壁都市から代表的な事例を取り上げて、各種の地図類、とりわけベルギー国土地理院刊行の古地図・地形図・空中写真や現地調査の成果をもとに、都市囲郭の16世紀以降の変遷を具体的にたどってみることにしたい。

1. 低湿なベルギー北西部における囲郭都市：ブリュッヘ

この地域では、オランダの主要部と同様に低湿な平地が広がっており、排水に意が用いられている。そのため、囲郭が都市防衛の機能を果たす必要がなくなった後も、囲郭の主要素の1つをなす周濠が程度の差こそあれ現在も残っており、排水路を兼ねた運河として機能している例も多い。本節では、かかる特徴をもつ囲郭都市として西フランドレン州の州都であるブリュッヘを選んで、その都市囲郭の変容の概要をみておく²⁴⁾。

ブリュッヘは、ベルギー中部から東部にかけて広範囲に広がる第三紀砂岩層の西端に立地し、その西方、北海海岸沿いに伸びる海岸砂丘との間は、歴史時代に沖積・干拓が進んだ海拔5m未満の低地帯である。古代に複数のローマンロードがこの地でレイエ川を渡っていたらしく、ブリュッヘという名も橋を意味するという。中世になると、レイエ川沿いに領主の城郭が建設され、それに隣接して生まれた商人集落にも囲壁が施されてフランドレン地方の商工業の中心地として発展した。とくに1134年以降、ズヴィン湾を経て北海にでられるという舟運上の利点を活かして²⁵⁾、フランドレン地方とヨーロッパ各地を結ぶ商工業都市として大いに発展した。かかる都市発展にともなって、1127～28年には周囲3km余りの第1次都市囲郭が建設され、ついで1297～1300年にはその外側に周囲約7km第2次囲郭が建設された。かくて、12世紀にフランドレン地方で最初に都市権を獲得したことで知られるブリュッヘは14世紀に最盛期を迎え、人口約8万人を擁したという。

しかし、15世紀にズヴィン湾で土砂堆積が進み、ネーデルランドの商工業の中心がアントウェルペンに移ると、ブルゴーニュ公の居住地としてフランドレン地方の文化的中心へと機能変化を遂げた。資料A(図5)やブラウン＝ホーヘンベルフの平面図的鳥瞰図は、ブルゴーニュ公の文化的後楯も無くして衰退期に入るブリュッヘの状況を表わしており、レイエ川の流路を周濠に利用した第1次囲郭と、幅20～30mの内外2重の周濠と城門・囲壁ないし土塁・風車からなる第2次囲郭が明瞭に読み取れる。17世紀になると、第2次囲郭の2重の周濠に大小の稜堡が無数に付置され、18世紀に入るとその周濠の外側にも塁壁や

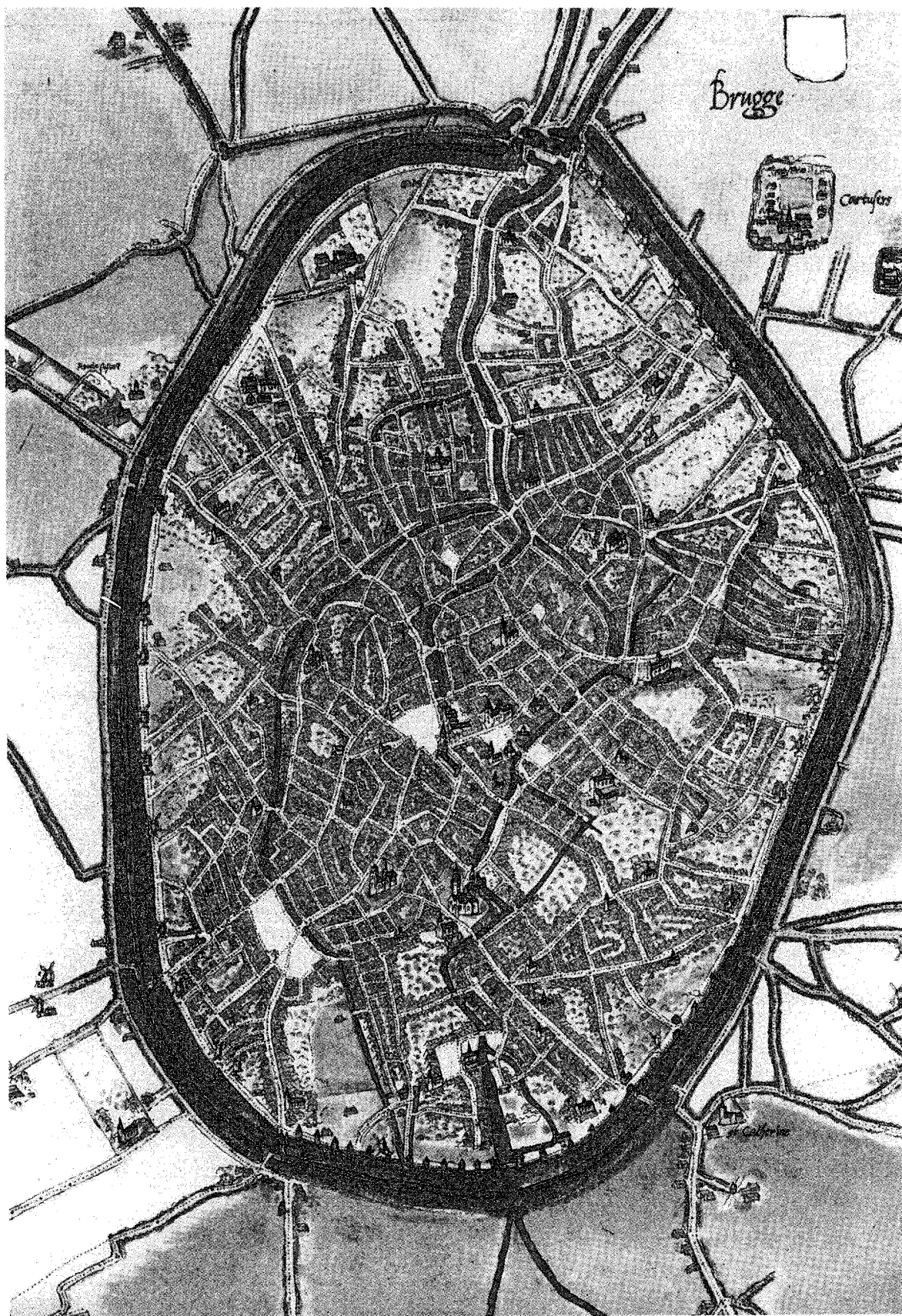


図5 資料Aにみる16世紀のブリュッヘ<©IGN, Belgie>



図6 資料Bにみる1770年代のブリュッヘ<©IGN, Belgie>

斜堤が廻らされるばかりでなく、北端部では濠が拡幅されて防御も一層嚴重になった。資料Bはかかる18世紀後半の状況を示しており、周濠の外側を廻る塁壁に樹木が植わり、斜堤を隔てて更にその外側に（並木）道が走っていたことがわかる（図6参照）。フランスのヴォーバン将軍の考案になるこのような囲郭の多重化も、18世紀を頂点としてその後は廃れていったようで、19世紀中頃作成の地形図である資料Dでは、第2次囲郭の外側の周濠の幅が狭くなるとともに17世紀に造られた稜堡もその形が崩れてしまい、20世紀になると第2次囲郭の北西部は埋め立てられてしまった。

しかし、ブードヴェイン運河によって北海に面する外港ゼーブリュッヘ（Zeebrugge）と



図7 現行の地形図に見るブリュッヘ

<1:25000地形図Brugge-Moerkerke図幅(13/1・2) ©IGN, Belgie>

最短距離で結ばれているほか、ブリュッヘ＝ヘント運河やブリュッヘ＝オーステンデ運河によってベルギー各地ばかりでなく西ヨーロッパ各地と結ばれているため、現在でも第2次囲郭の内側の周濠は舟運に大いに利用されており、第1次囲郭の周濠さえも舟運——ただし、この場合は観光船の比率が高い——に利用されている。しかもまた一方で、R30と呼ばれる環状道路が、南西部を除いて、第2次囲郭に沿って走っている(図7, 写真1参照)。

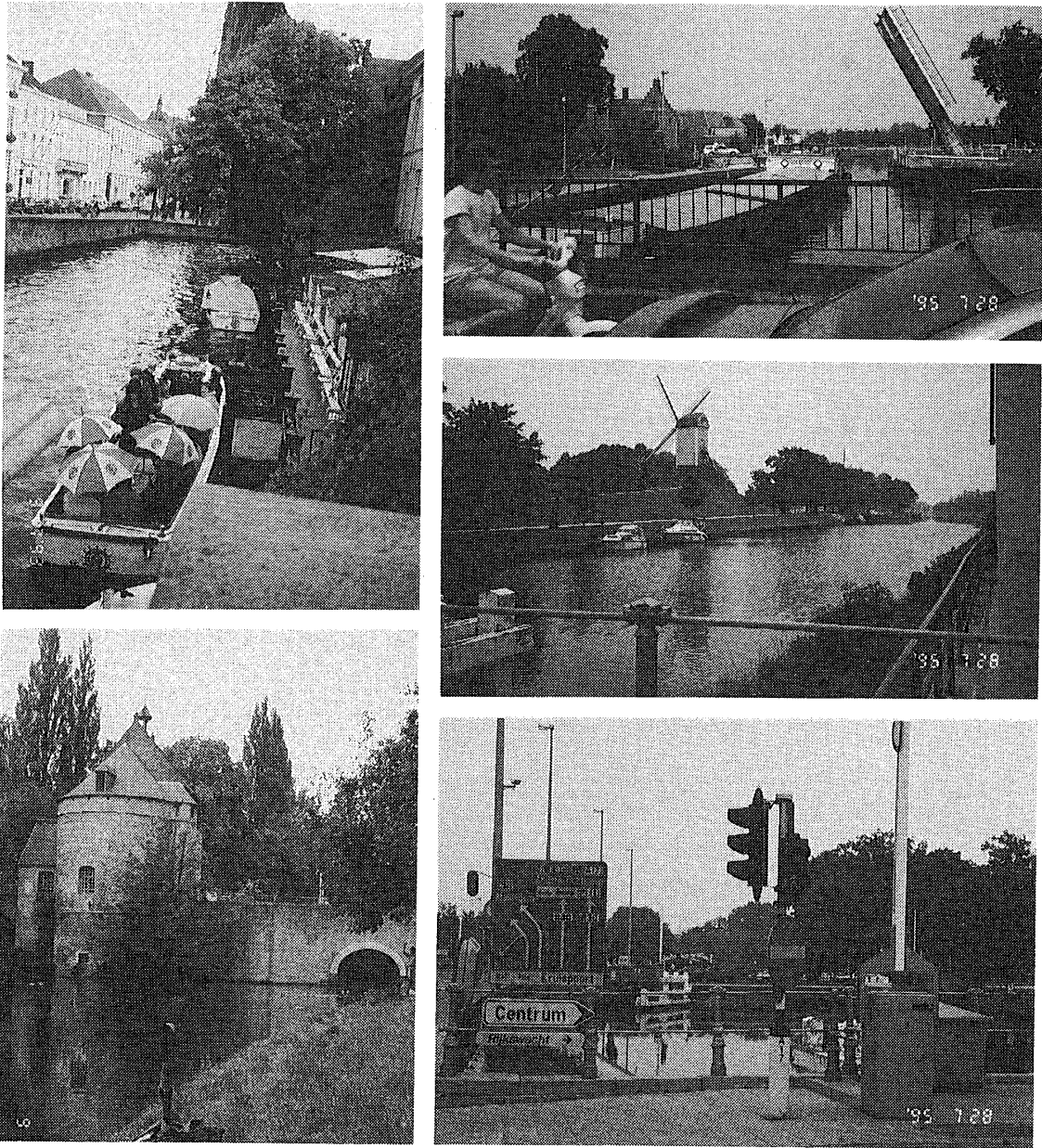


写真1 ブリュッへの第1次・第2次囲郭の現状

左上：第1次周濠（レイエ川）と観光船。左下：ロバの門付近の周濠。この先は周濠が埋め立てられて道路に転用されている。 右上：ダム門周辺の舟運と跳ね橋。 右中：十字門北側の周濠・舟運・風車。 右下：十字門東側の周濠に架かる橋上より。

2. 緩やかな起伏のベルギー中央部における囲郭都市：ルーヴェン

この地域では、第三紀始新世の地層を基盤として、標高20~100mの緩やかな起伏をもつ耕地が広がっており、そこを流れる河川沿いに囲郭集落が発展した。そのため、囲郭が本来の機能を果たす必要がなくなると、地域中心地として近代都市化していった多くの囲郭都市では、都市発展を阻害する囲壁が破壊されたばかりでなく、周濠も地形条件に適っている場合を除いて埋め立てられ、かつての環状の囲郭が現代の高速環状道路に姿を変えて

いる例が多い。本節では、筆者が現地調査の折に滞在したベネルクス最古の大学町たるルーヴェンを選んで、その都市圏郭の変容過程を紹介する²⁶⁾。

ブラバント州第2の都市たるルーヴェンは、スヘルデ川の1支流であるデイル川が第三紀層を開析して形成した標高20~30mの沖積地に位置する。集落の起源は9世紀末のノルマン人侵入時の駐屯地に求められるが、まもなく神聖ローマ皇帝がノルマン人を追って都市の第1の核となる城郭を、ついで11世紀初めにランベール伯爵が第2の核となる城郭を、ともにデイル川沿いに建設した。そして1150年頃に円形に近い形状の第1次圏郭が聖ピエール教会を中心として建設され、織物業を中心とするブラバント地方の中心地の1つとして発展していった。1350年には、第1次圏郭のはるか外側に、外周約7km・城門8の第2次圏郭の建設が開始された。さらに1425年にはローマ教皇によってネーデルランド地方

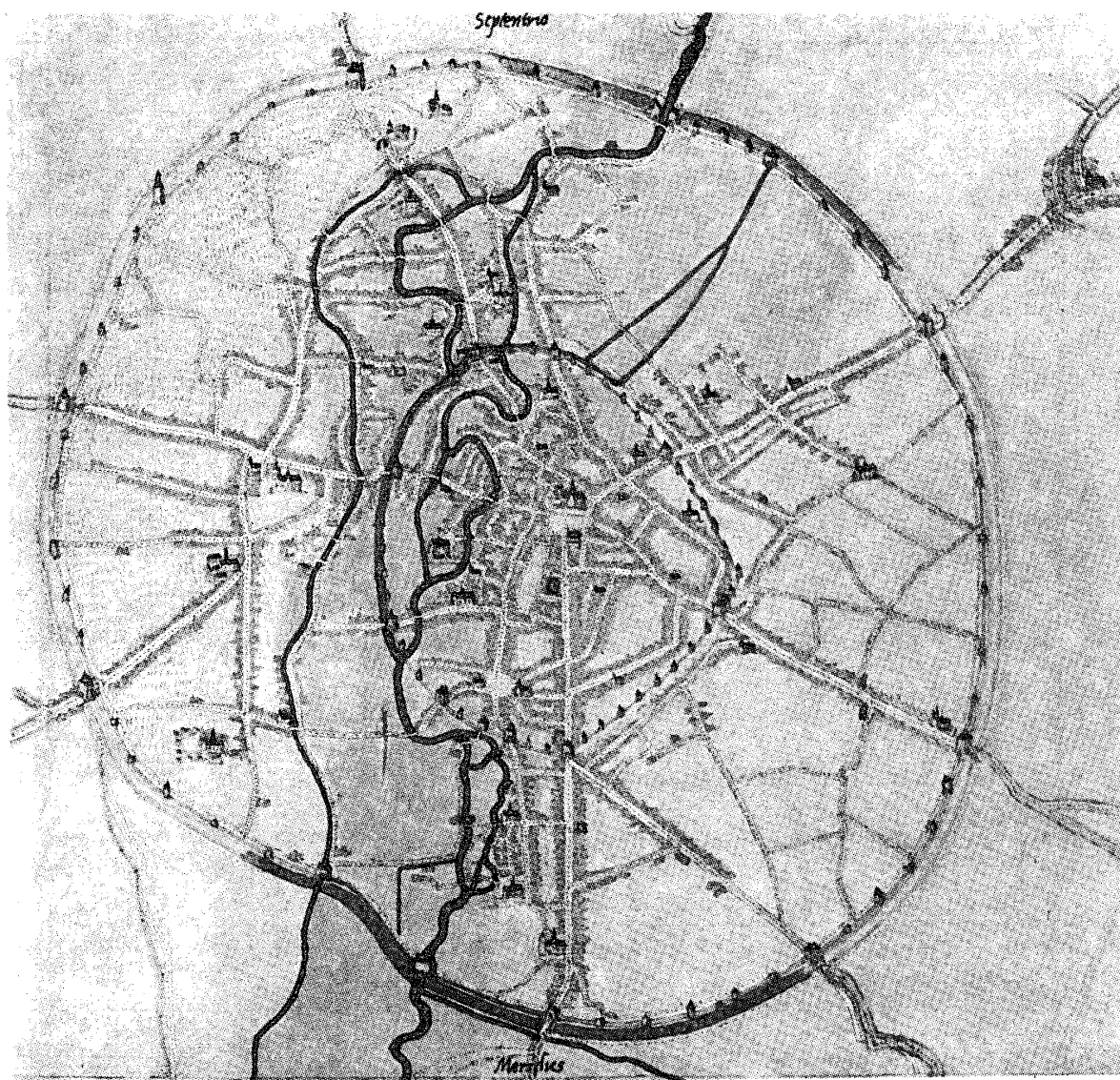


図8 資料Aにみる16世紀のルーヴェン<Atlas of Leuven,1974,Interleuven より>

で最初の大学（ルーヴェン・カトリック大学）が創設され、16世紀初頭まで戸数は増加を続けた。

資料A(図8)は、衰退に転じたルーヴェンの状況を示したもので、第1次囲郭も第2次囲郭も簡単な囲壁が多く塔と城門を繋ぎ、囲壁の外側には一部を除いて周濠が廻らされているものの、デイル川の水は周濠全体に及んでおらず、空濠の様子を呈している箇所が全体の半分以上を占めている。また、第1次囲郭の内部さえも宅地で充填されているわけではなく、第1次囲郭～第2次囲郭の間には各種の利用形態の農地が広がっている。かかる状況はブラウン＝ホーヘンベルフ都市図帳を見てもほぼ同様である²⁷⁾。その後、17世紀前半に第2次囲郭の外側の街道出口5箇所に稜堡が設けられ、遅ればせながら都市防衛施設が増強された。

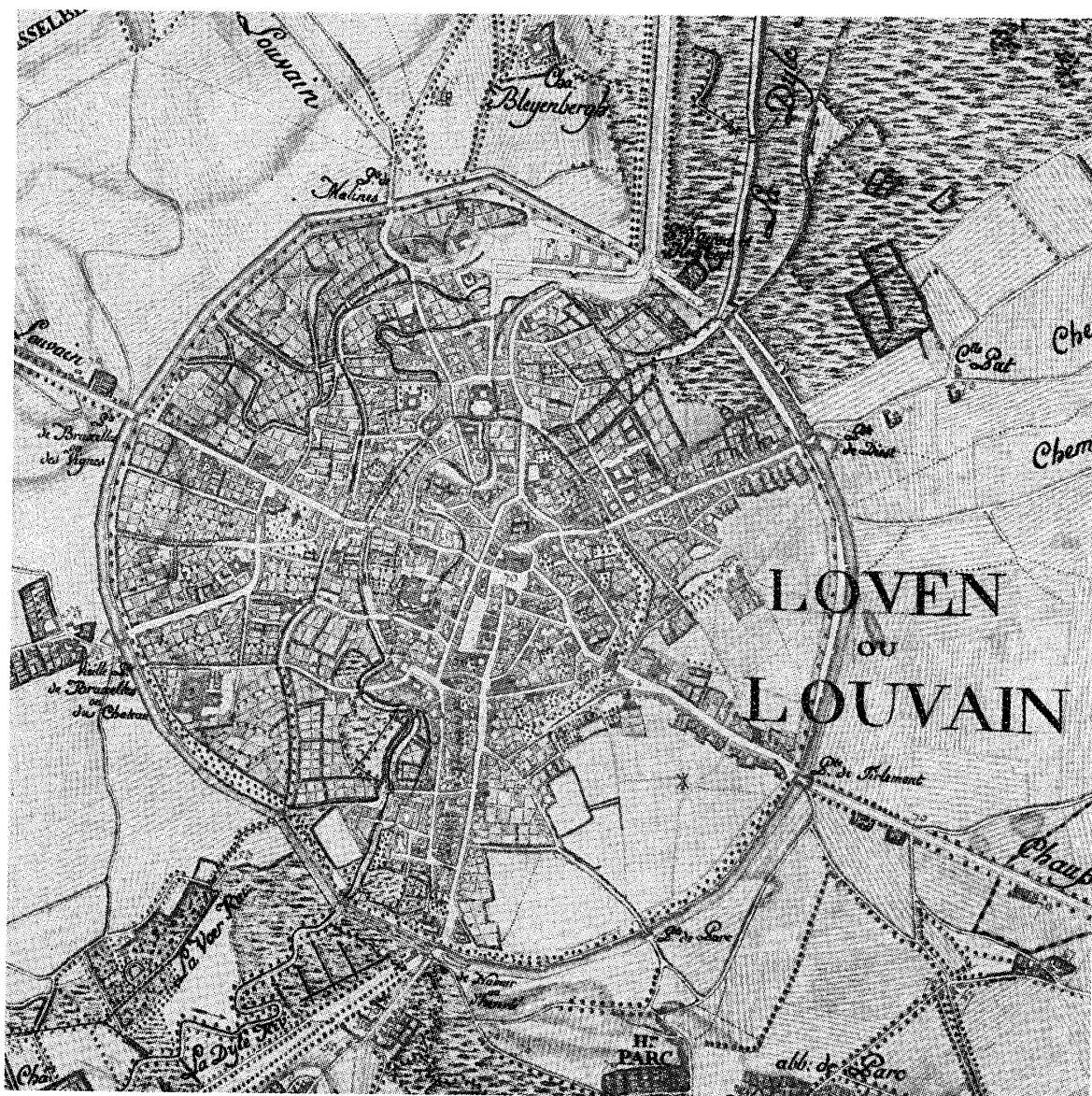


図9 資料Bにみる1770年代のルーヴェン<Atlas of Leuven, 1974, Interleuven より>

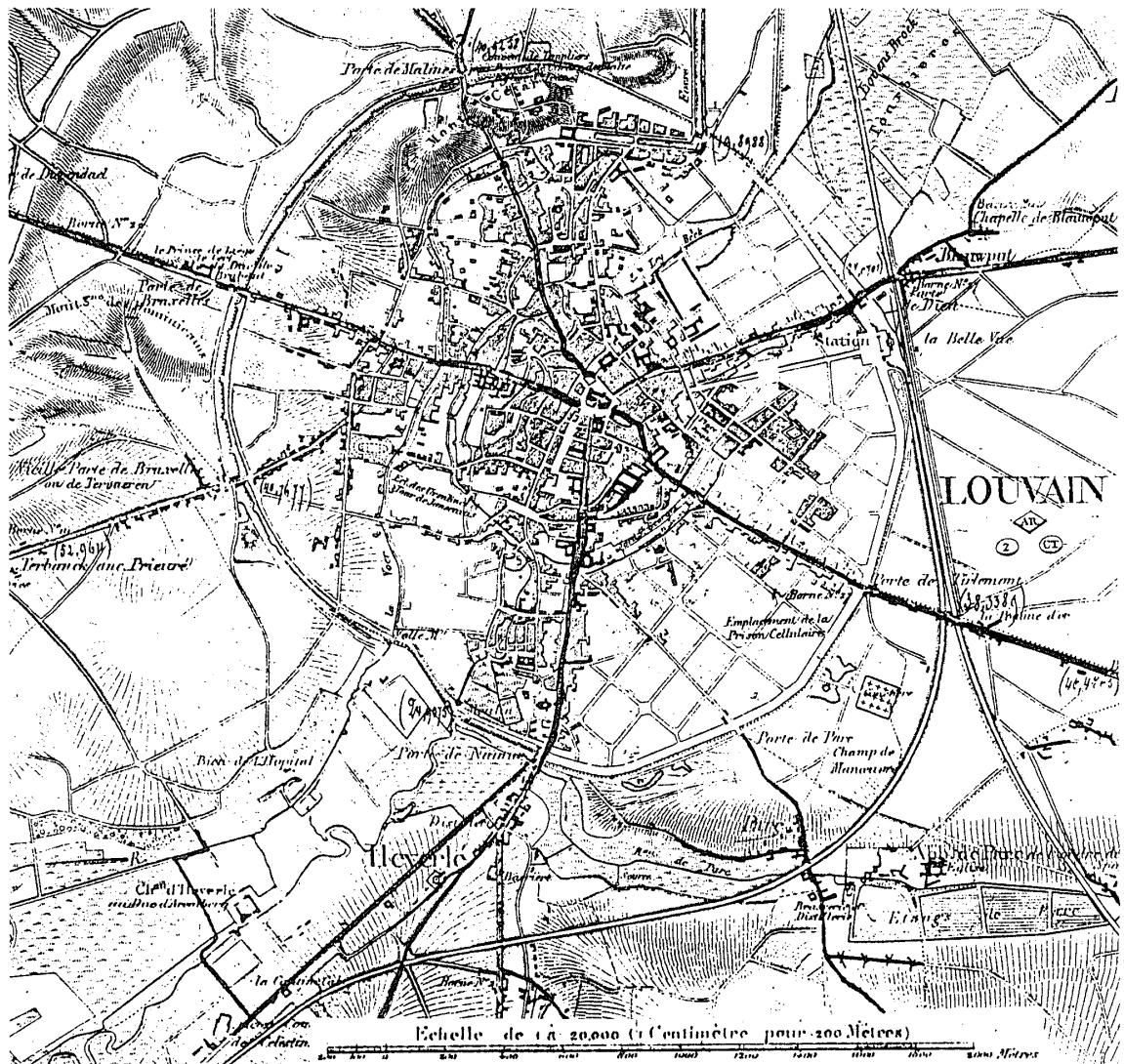


図10 資料Dにみる19世紀中頃のルーヴェン< Louvain図幅 (8/12) ©IGN, Belgique >

18世紀になるとルーヴェンとベルギー主要都市を結ぶ道路が整備され、1750～52年にメヘレンに至るデイル運河が開削された。これら交通網の整備によって、ルーヴェンはブラバント中東部の中心地として再び人口増加に向かう。1770年作成の資料B(図9)はその当時の状況を示しており、ルーヴェン北端の運河始発地付近(1230年頃再建のセザール城の東)には新たな道路と建物が見られ、周囲の自然発生的な道・区画と対照をなしている。また、第1次囲郭の周濠や囲壁も部分的に地形図に示されなくなっている。そして、17世紀初頭～18世紀中頃にわたって4度の改修を受けた第2次囲郭も、1781年に当時の支配者たるオーストリア皇帝ヨセフ2世の命令で撤去されることになり、1830年に囲郭の防御機能は取り除かれた。そのため1855年作成の資料D(図10)を見てみると、次のような変化が読み取れる。

a) 第1次囲郭の周濠と囲壁は西半部で残り、東半部では道路ないし公園に変わっている。



写真2 空中写真でみるルーヴェン<B1-90,F32-1208 縮尺1:21000 ©IGN,Belgie>

- b) 第1次囲郭と第2次囲郭の間に宅地が増加し、とくに東半部では直行する道路網によって2種の整形な区画群が生まれている。
- c) 第2次囲郭では、周濠・囲壁ともそれぞれ元の高さを生かした道路に変わり、ルーヴェン市街地を取り巻く環状道路として利用されている。
- d) 鉄道駅が第2次囲郭の東外側に開設され、それに接する囲郭部分が平坦化されて駅前広場となり、そこから市街地中心部へ向かう直線道路が建設された。

当時人口約3万人だったが、第2次囲郭の外へも宅地・工場が進出し、2度の大戦で多大な被害を受けたものの、第2次大戦後市街地は一層拡大し、現在に至っている²⁸⁾(写真2

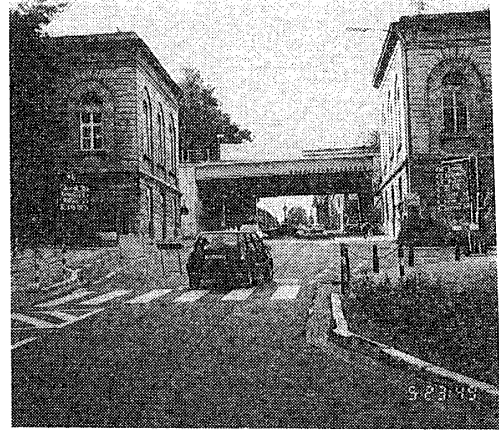
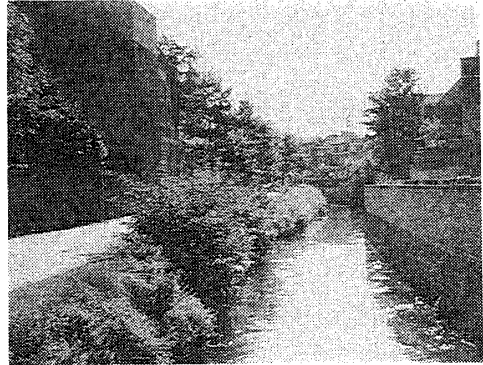
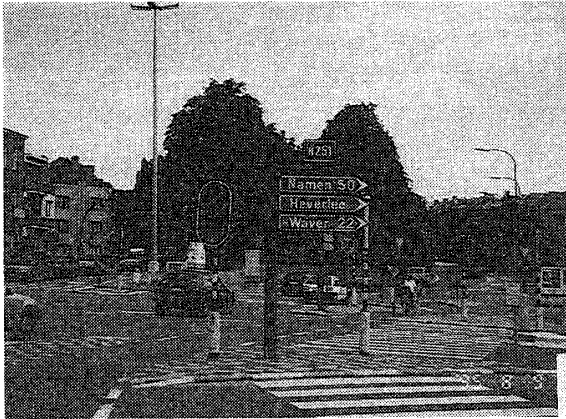
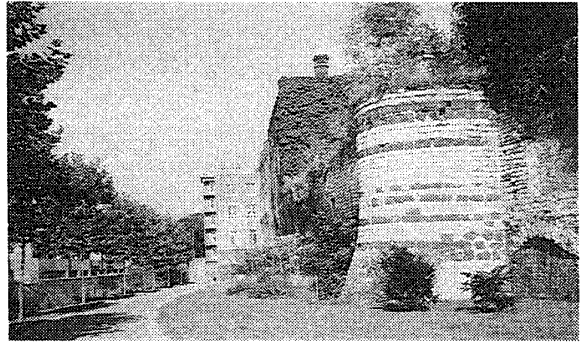
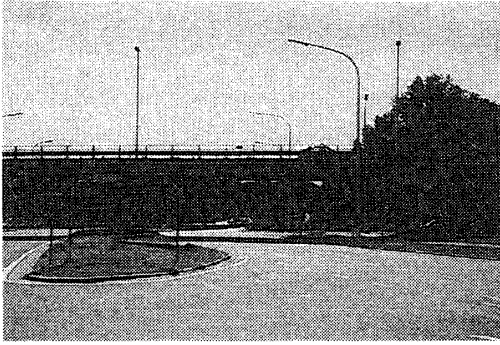


写真3 ルーヴェンの第1次・第2次囲郭の現状

左上：Tervuurse Vestでの立体交差。上を走る環状道路が第2次囲郭の跡。左中：Naamse Poort付近。車の走る環状道路の間にある歩行者用の散歩道（正面の木が茂っていて高くなっているところ）が第2次囲郭の土塁跡。左下：Tiense Poort付近の環状道路。歩行者用の散歩道の部分（左側の木の茂っているところ）がNaamse Poort付近と違って車道と同じ高さに低下している。右上：第1次囲郭の名残り。左側が周濠の役割を果たしたデイル川。右中：その少し下流で逆向き。正面のデイル川が手前に流下。第1次囲郭の外（右側）は中層団地になっている。右下：Brussel Poort付近の立体交差。ブリュッセルに向かう道路が第2次囲郭を出る両側に検問所の建物が残っている。

参照)。かつての周濠や囲壁も、デイル川の支水路として機能している第1次囲郭の西部を除いて周濠は姿を消し、囲壁も第1次囲郭でかつての姿を部分的に留めているのみで、第2次囲郭は自動車交通の重要度が高まると、囲壁部分が相対的に高いことを活かしてR23

という環状道路として機能している（写真3参照）。

3. アルデンヌ高原とムーズ河谷からなるベルギー南東部の囲郭都市

この地域は基盤が古生層からなり、地形・地質上は4区分できるが²⁹⁾、本稿では前述の2地域と異なる囲郭都市を紹介するという意図のもとに、ムーズ河谷部の囲郭都市としてリエージュを、高原部の計画的囲郭都市としてマリアンブールとフィリップヴィルを取り上げたい。

[リエージュ] リエージュ州の州都であるリエージュは³⁰⁾、アルデンヌ高原前地というべきコンドロズ丘陵の北端を古生層の走行に合わせて東北東方向に流れるムーズ川に、支流のウルト川が合流する地点に位置し、川沿いの沖積地から兩岸背後の丘陵にかけて現在の市街地が広がっている。このリエージュの集落としての起源は、グレンという細流がムーズ川に流れ込むあたりの小村に遡る。この地が発展を遂げるきっかけは、8世紀初頭にトンヘレンの司教ランベールがこの地で暗殺されて彼の墓が聖地となり、さらに9世紀には司教の宮殿が建てられて、リエージュ司教領の中心となったことである。

リエージュの囲郭化は、10世紀後半に神聖ローマ皇帝の権威を後楯としてノートゲル司教によって開始された。当初は、囲壁はムーズ川左岸のみで、河川の流路を周濠の代わりとする方法をとった。しかし、彼の後継司教によって13世紀初頭までに、大聖堂や司教宮殿のあるムーズ川左岸で背後の斜面も取込むように囲壁を拡張したばかりでなく、この左岸地区と島橋で結ばれるムーズ川左岸中洲地区（ムーズ川とその西方への分流たるソベニエール川との間）や、左岸地区とアーチ橋で結ばれた右岸中州地区（ムーズ川とその東方への分流との間）でも、河川を周濠としてその内側に囲壁を廻らすことで、囲郭の拡大が図られ、教会関係施設の極めて多い、かつ宅地ばかりか農耕地も囲い込んだ囲郭都市ができあがった。そして、単に宗教都市としてのみならず、宗教関係の建築・土木建設に関わる商工業、次いで石炭業採掘や軍需品生産といった産業の町として、ムーズ川流域最大の都市に発展していった。

リエージュは上述のようにリエージュ司教領の主都なので、ハプスブルク家領ネーデルランドを対象にした資料Aには描かれていないが、16世紀後半～17世紀前半に描かれた都市図を見てみると³¹⁾、船が行き交うムーズ川河岸は囲壁と水門・城門で守られ、左岸では要所に塔を備えた囲壁が司教宮殿背後の丘陵を廻っている。

17世紀後半からリエージュの経済は相対的に低下し、1789年には長らく続いたリエージュ司教領も幕を閉じる。資料Bの地形図はその直前のリエージュを示しており、市街地を廻る囲壁は取り崩されたらしいが、司教宮殿を見下ろす丘陵の突端部に稜堡を備えた五角

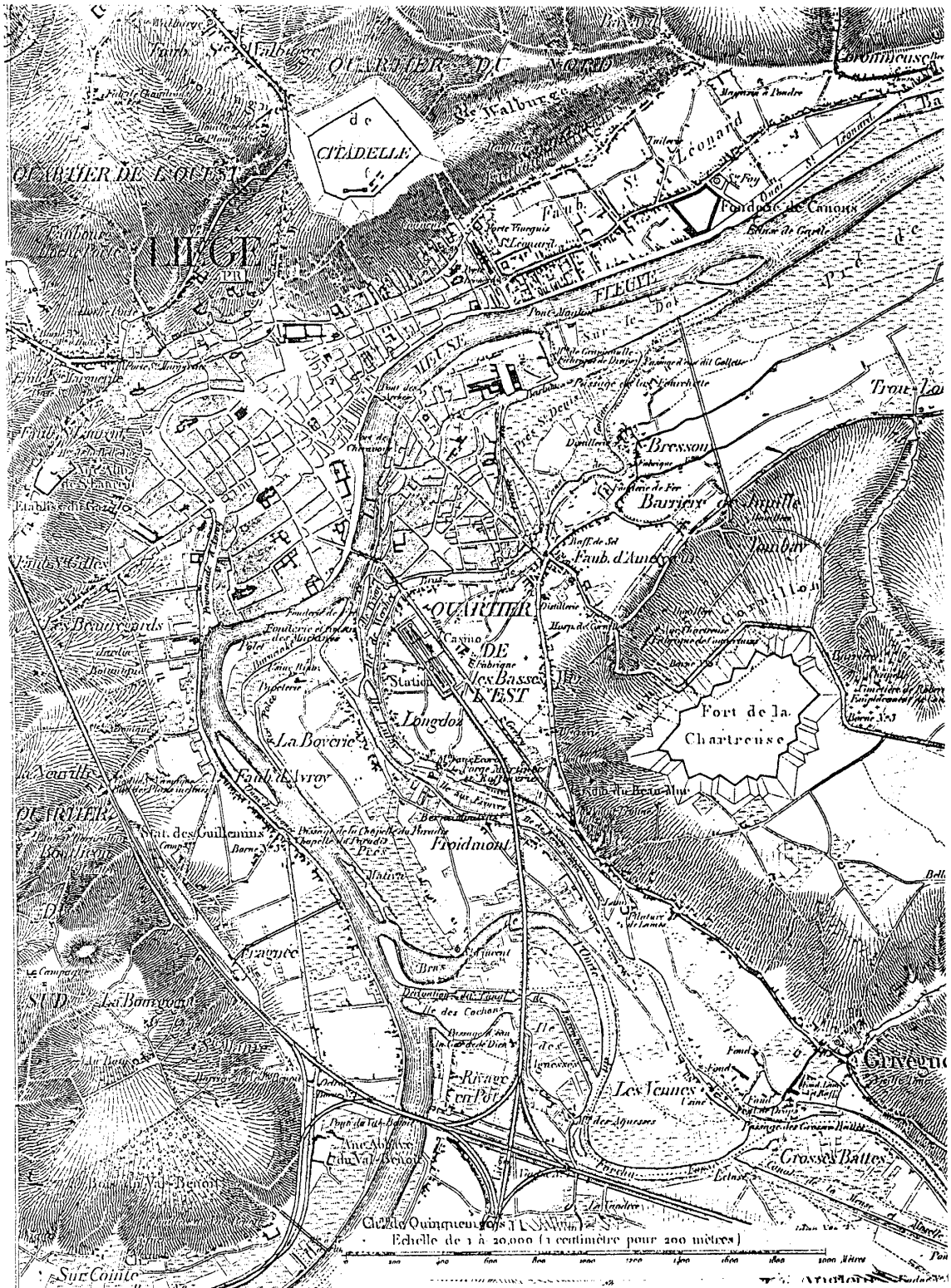


図11 資料Dにみる19世紀中頃のリエージュ<Liège図幅 (15/5) ©IGN, Belgique>

形の城砦が新設されている。それから3/4世紀後のベルギー独立直後の資料D(図11)では、市街地の南部を取り巻いて流れていたソベニエール川が埋め立てられて道路となり、最古の都市核をなす旧左岸地区と旧左岸中洲地区が街路の上でも一体化の方向へと進みだす一



図12 現行の地形図に見るリエージュ

< 1 : 25000地形図 Allier-Liège図幅(42/1・2), Seraing-Chênée図幅(42/5・6) ©IGN, Belgique >
1方眼が1km四方。

方、ムーズ川右岸の洪積台地に要塞が新設され、左岸の城砦とムーズ川をはさんで両側からリエージュ市街地を防衛する体制となった。鉄道の駅はムーズ川の両岸に1つずつ市街地の外に設けられた。

産業革命の浸透とともに、リエージュは石炭・製鉄業や繊維工業のムーズ川流域における1大中心地として再び経済的に繁栄するが、第1次大戦および第2次大戦で大きな被害を受け、繁栄の基盤たる鉄鋼業の斜陽化とともにベルギー国内での重要性はかつて程ではない。とはいえ現在でも(図12参照)、首都ブリュッセルをはじめとするベルギーの主要都

市を貫いてドイツのルール地方に至る交通路とムーズ川河谷の交差する要衝として、その市街地は河谷の沖積地ばかりでなく、周囲の台地や丘陵上にまで広がっている。ムーズ川の流路も、右岸の分流が一本化され、2千トン級の船が航行できる本流ともども流路の拡幅・単純化が図られた。そのため、かつての囲郭はほんの一部を除いて跡形を留めず、周濠の役割を担った旧流路は道路ないし宅地に変わってしまった。また、18世紀の地形図に登場する左岸の城砦は公園と病院の敷地に転化し、19世紀の地形図に現れる右岸の要塞は

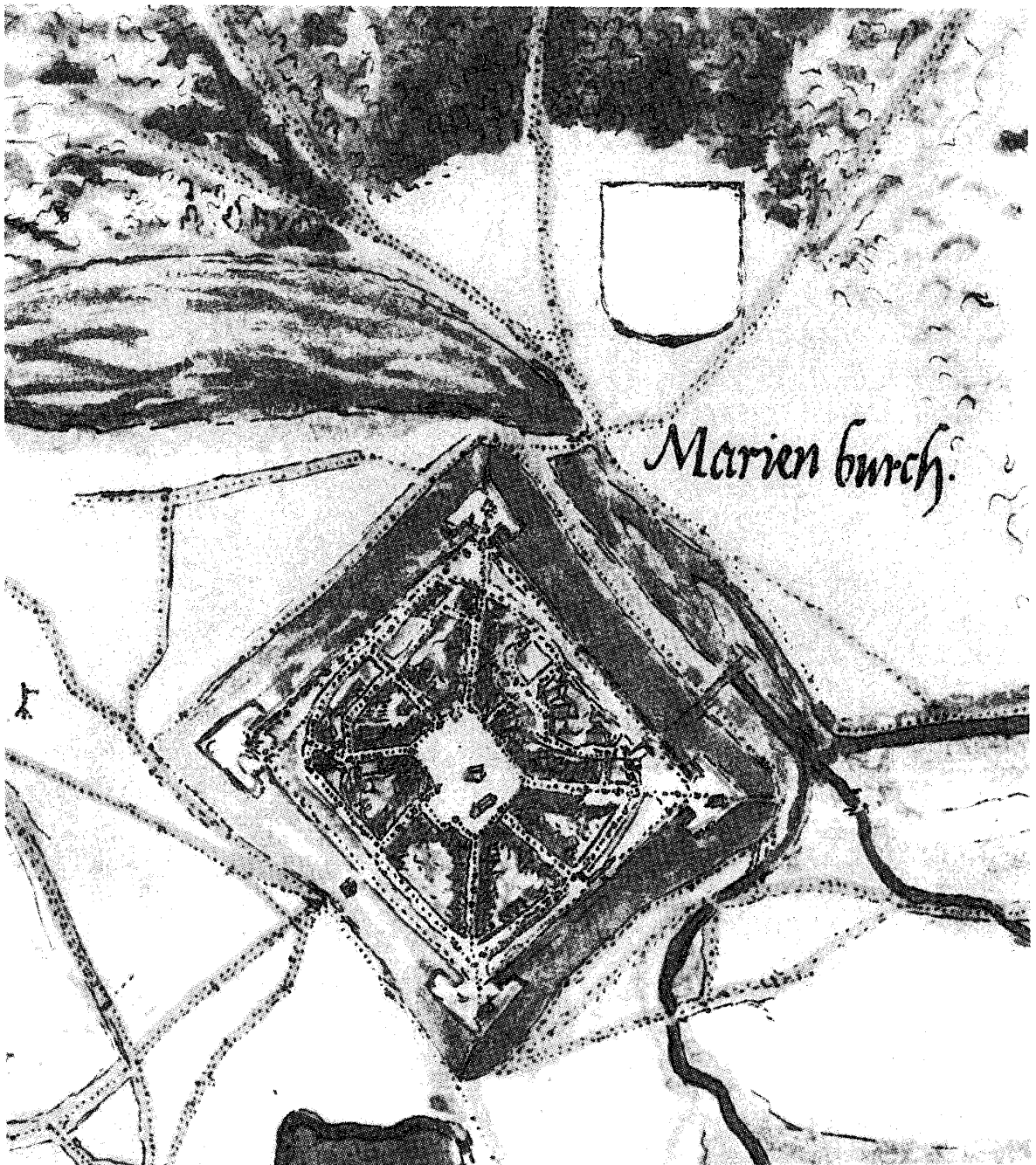


図13 資料Aにみる16世紀のマリアンブール<©IGN, Belgie>
方位は上が北

軍用地として利用されている。

[マリアンブール] マリアンブールは、ナミュール州南西部のアルデンヌ高原前地の小盆地に位置し、ムーズ川の1支流たるオ・ブランシュ川がその南側を、その支流（ブルフ川）が北側をともに西流している。フランスとの国境に近い（現在、フランスとの国境は南約15km）ことから、ハプスブルク家の対フランスの戦略拠点として1542年に建設された。その名は、神聖ローマ皇帝カール5世の妹で当時のネーデルランド総督だったマリアに因む³²⁾。

計画的な軍事要塞として建設されたマリアンブールの形態は、当時流行の理想都市の理念を忠実に体現する正方形で³³⁾、中央の広場から8方向に放射状の道路が伸び、四辺を道路と囲壁が取り巻いていた。そして、東西南北の四方を指す正方形の頂点に、それぞれ小規模な稜堡が築かれた。建設されて程遠からぬ時期の状況がデヴェンテル都市図（図13）に描かれており、それを見ると、西部がいくぶん高いために周濠の西側はすでに空濠になっているのに対して、ブルフ川は要塞北端の狭隘部で塞き止められて幅広い河床を形成している。

このマリアンブールは、要塞建設のわずか12年後にフランス軍に占拠され、まもなくスペイン軍に取り返されたのを端緒として、フランスとスペインないしオーストリアとの争奪の場となったが、17世紀中頃のJ.ブラウの都市図集をみてもその形態に変化はない³⁴⁾。18世紀後半の資料B・Cでもはっきりと描かれている要塞の防御施設が撤去されるのは1853年である。翌年作成の資料D（図14A）を見てみると、正方形の市街地の周囲にあった周濠と稜堡がなくなっており、市街地の周囲にはかつての防御用地が空地として広い面積を占めている。そして、その東部の一角に5方向へと伸びる鉄道の駅が設置されている。その後約百年を経た1948年の1：20000地形図を見ると、この空地が宅地や園地として利用されだしており、現代の1：10000地形図（図14B）ではその部分の宅地化がいっそう進んできたことが知られる。

[フィリップヴィル] フィリップヴィルはマリアンブールから約13km北に位置し、同じくナミュール州に属する³⁵⁾。マリアンブールがフランス軍に占領された1554年に建設され、その名はカール5世の長男フィリップ（後のイスパニア国王フェリッペ2世）に因む。

フィリップヴィルも、マリアンブールと同様に中央の広場を対称軸としていたが、外形は五角形で10方向に放射状の道路が伸びていた。そして、五角形の各頂点に矢尻状の稜堡が築かれ、囲壁と周濠が周囲を取り巻いていた。L.グッチャルディーニの図によれば³⁶⁾、実際に建設されたフィリップヴィルの形状は当初の計画のような正五角形ではなかったようである。マリアンブールよりも規模が大きかったので、建設直後こそ兵士だけの住まう

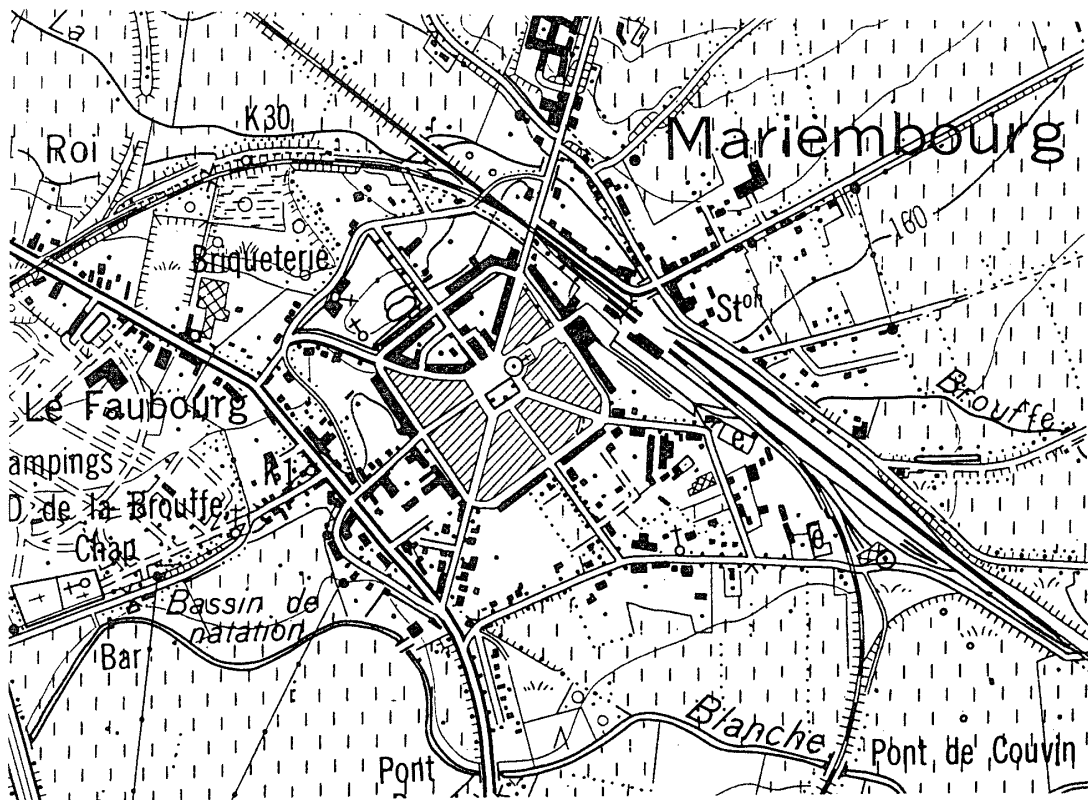
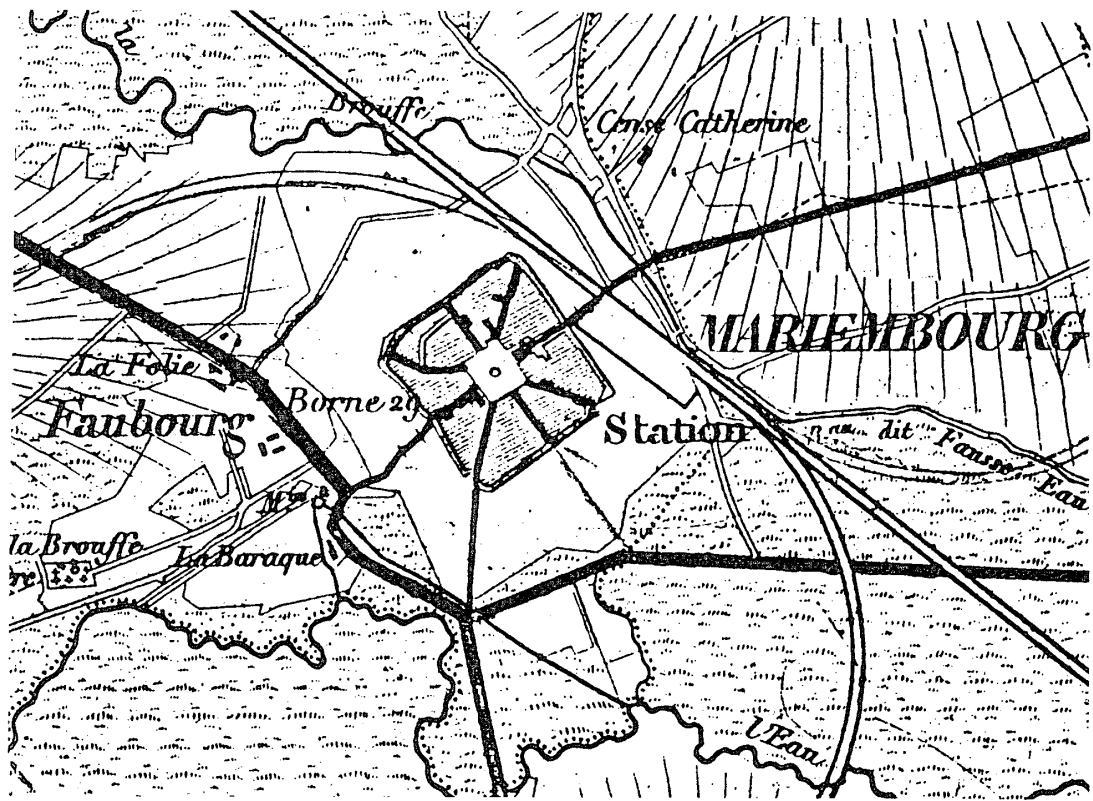


図14 資料Dおよび現行の地形図にみるマリアンブール<©IGN, Belgique>

上 (A) : 資料D < Couvin 図幅 (17/15) > 下 (B) : 1 : 10000 地形図 Couvin 図幅 (57/8)
A・Bとも同じ範囲・縮尺。

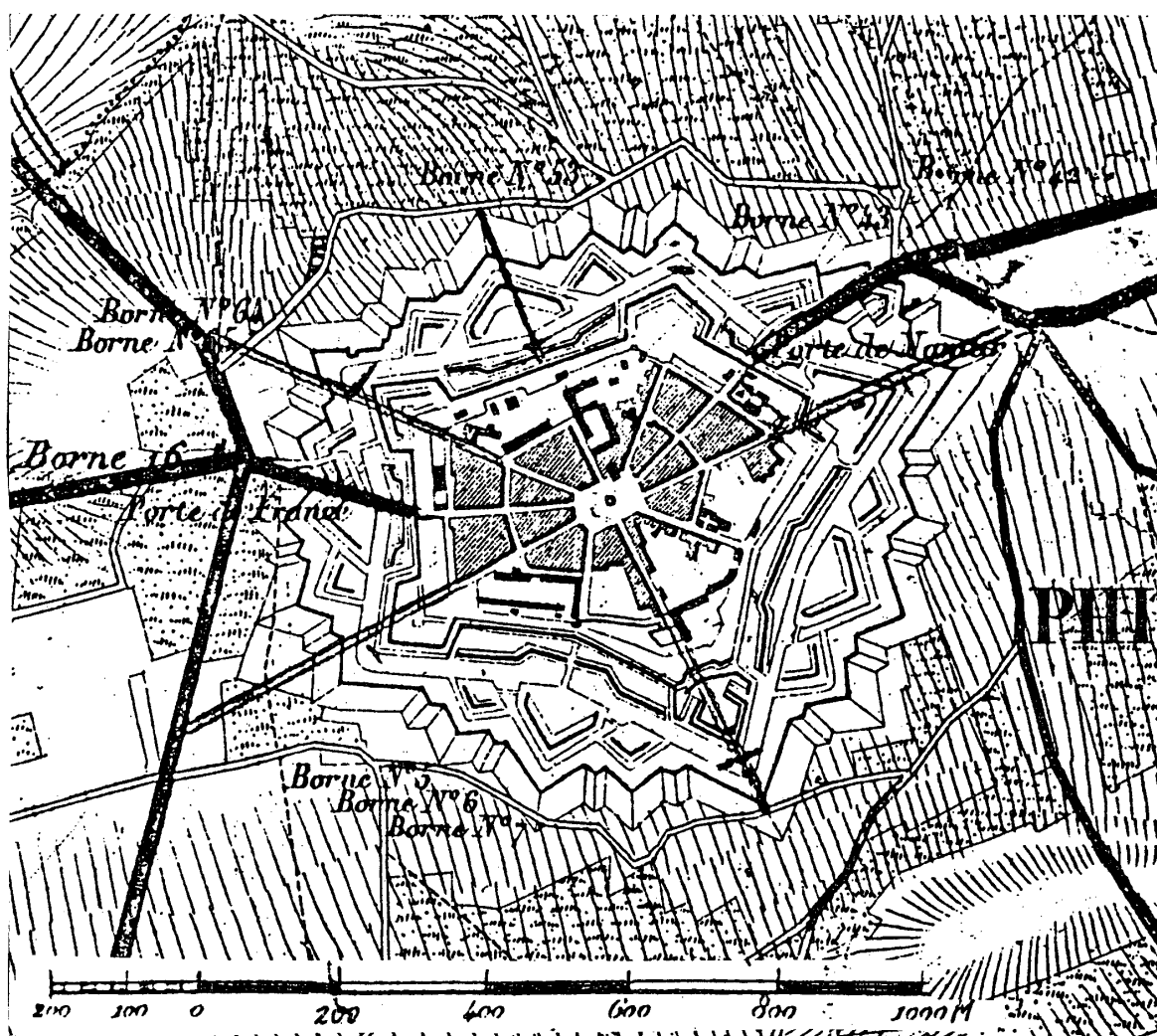


図15 資料Dにみる19世紀中頃のフィリップヴィル
〈Philippeville図幅 (17/11) ©IGN, Belgie〉

要塞であったが、その後周辺の農村から一般住民がこの要塞に移住してきて、軍事的集落というべきものになっていった。

1659年にピレネー条約でフランスの領土となると、ヴォーバンの計画に基づいて防御設備は強化され、周濠の外にも大小様々な半月堡や斜堤が設置された。1780年の資料Cでもフィリップヴィルは囲郭都市として描かれており、1831年のロンドン会議での提案を受けて1856年に解体された要塞施設の最後の姿が1854年の資料Dの地形図(図15)によく示されている。

20世紀になっても、五角形の集落部分における放射状の街路とそれらを繋ぐ同心円状の街路、および要塞と周囲の農耕地とを限る外郭線はよく残っており、それは現代の地形図や空中写真(写真4)からも読み取れる。しかも驚くべきことに、要塞の中心部と外縁部とを繋ぐ地下道さえも未だに残されている。

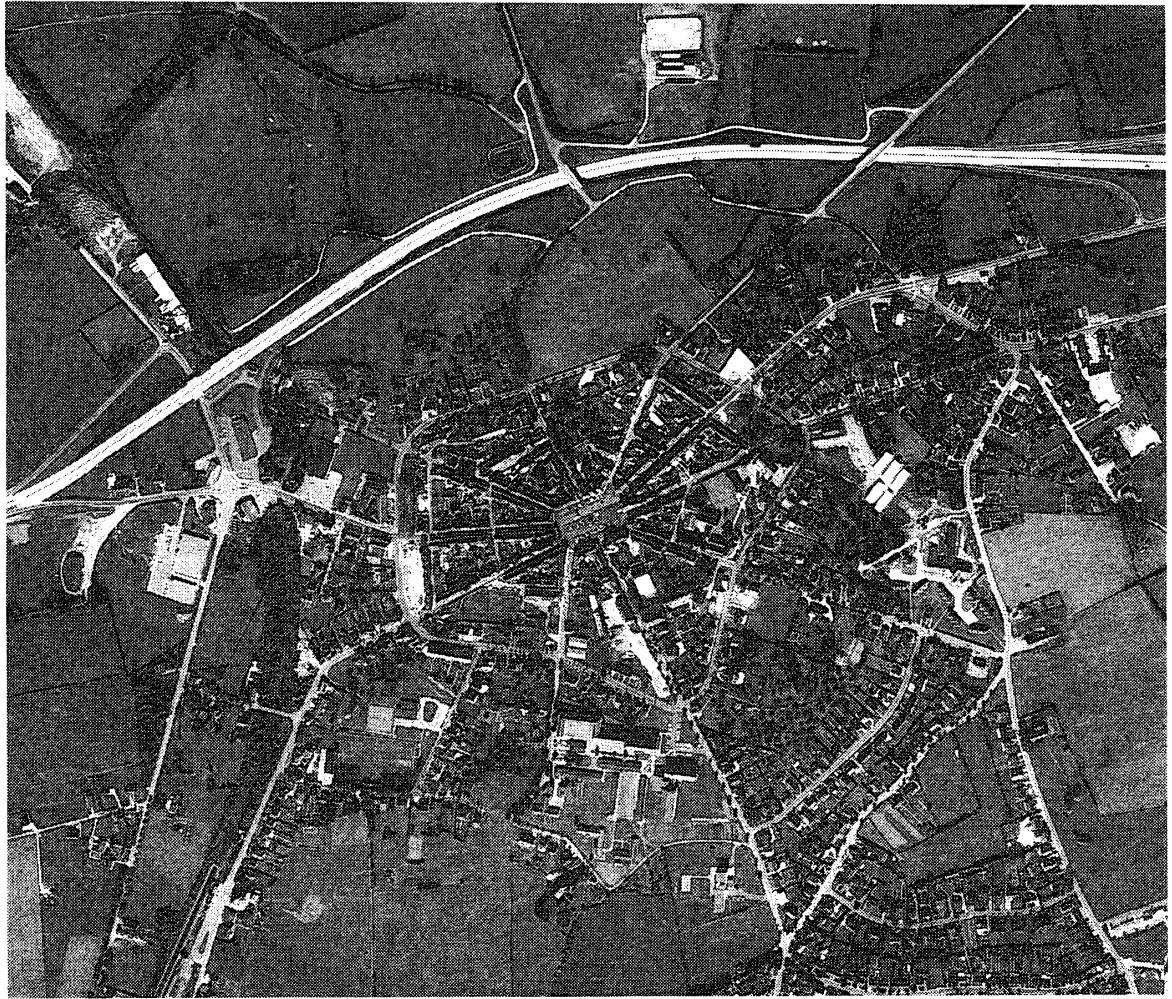


写真4 空中写真でみる現代のフィリップヴィル
<B8-89,F53-1605 縮尺1:21000 ©IGN,Belgie>図15とほぼ同じ範囲・縮尺。

V. 今後の研究へ向けての課題

以上、ベルギーを対象に、第1章で記した研究意図に基づいて、第2章ではベルギーの囲郭集落に関して現在筆者の手許にある資料を各種列挙し、第3章ではいくつかの文献に拠りつつベルギー囲郭集落の発生過程をたどり、とくに16~18世紀の囲郭集落の全般的な分布の特徴を記した。その上にたって第4章では、低湿なベルギー北西部、緩やかな起伏のベルギー中央部、アルデンヌ高原とムーズ河谷からなるベルギー南東部の3地域における囲郭都市の典型的特徴を、各種の地図資料や現地踏査をもとに具体的な事例で説明しようと試みた。その結果、次のようなことが指摘できた。

- a) 低湿なベルギー北西部の囲郭都市の例として取り上げたブリュッヘ（西フランドレン州）の場合、都市の成長に合わせて2重の囲郭をもっていたが、かつての周濠の大部分がなお残っていて舟運に利用されている一方、囲壁は撤去され、周濠を含む囲郭用地の

一部も環状道路に転用されている。

- b) 緩やかな起伏をもつベルギー中央部の囲郭都市の例として取り上げたルーヴェン（ブラバント州）の場合、ブリュッヘより明確な2重の囲郭をもっていたが、第1次囲郭の一部がかつての姿を留めているのみで、第2次囲郭は環状自動車道路として転用されている。
- c) ベルギー南東部のムーズ河谷に立地する囲郭都市の例として取り上げたりエージュ（リエージュ州）の場合、市街地を貫流するムーズ川流路の拡幅・単純化が図られたためもあって、かつての囲郭はほんの一部を除いて跡形を留めず、周濠の役割を担った旧流路は道路ないし宅地になってしまった。囲郭完成後、時期を隔ててムーズ川兩岸の高地に建設された城砦や要塞のうち、市街地中心部を見下ろす城砦は公園と病院の敷地に転化した。
- d) ベルギー南東部のアルデンヌ高原にある囲郭集落の例として、計画的な要塞に起源をもつマリアンブールとフィリップヴィル（ともにナミュール州）を取り上げた。これら2集落の場合、近代における都市化の影響を比較的受けていないために、集落形態が囲郭の防御施設解体後も現代まで残っている。

筆者は、上記の4つの事例がそれぞれの地域類型の特徴を表わしていると考えているが、本稿作成の基礎とした学会発表の際に取り上げたダム・イーペル・ヴェルネ（Veurne）・トゥルネイ・ナミュール・ディナン・リール（Lier）の事例は、紙数の関係もあって割愛せざるをえなかった。今後さらに欧語で記された既往の研究成果を摂取するとともに、現地調査を重ねて、ベネルクス囲郭都市誌といったものにまとめることと、囲郭集落・都市の面から西欧・アジア・日本を結ぶ東西文化交流にも研究の視野を広げたいと希望している。

[付記1] 本稿は、人文地理学会の第56回歴史地理研究部会（1995年10月8日）で発表した「ベネルクス囲郭都市の現代的変容」と、日本地理学会1996年度春季大会（3月28日）で発表した「ベルギー北部における複式囲郭の変容」の2つを骨子としつつ、事例を大幅に削って執筆した。その作成にあたり、日本においてご教示をいただいたり、地図・資料の入手・コピーに便宜を図っていただいた高橋正（当時、大阪大学）・長谷川孝治（神戸大学）・吉田甫（宮崎大学）の各先生や在日ベルギー観光局・財ベルギーフランドル交流センターに対し、厚くお礼申し上げたい。また、ベルギーにあっては、滞在地のルーヴァン・カトリック大学の方々に何かとお世話になった。特に、Willy Vande Walle, Christian Kesteloot, 鞍岡和人, Paul Wostynの諸先生にはご教示・ご高配をいただいたり、現地調査に連れて行って下さった。心からお礼申し上げたい。さらに、地図・空中写真の転載を

許可していただいたベルギー国土地理院（院長 Joel De Smet氏）やHerman Van der Haegen氏に対し感謝の意を表します。

なお、資料の収集に当って、その費用の一部を文部省科研「ユーラシアにおける都市圏の成立と系譜に関する比較地誌学的研究」（課題番号06401017、代表者：戸祭由美夫）より支出した。

【付記2】 日本学術振興会の1995年短期在外研究員（ベルギー国）として派遣され、ベルギーで1月半の期間にわたって現地調査の機会を持てたことは、本研究の遂行にあたって大いに役立った。派遣に際しご尽力下さった関係者の方々に心から謝意を表するとともに、本稿をその主たる研究報告とさせていただきます。

注および文献

- 1) 戸祭由美夫：オランダ圏郭都市プランとその変容に関する予察（前篇）——ベネルクス圏郭都市研究（1）——。人間文化研究科年報（奈良女子大学），12，1997，163-176頁。
戸祭由美夫：オランダ圏郭都市プランとその変容に関する予察（後篇）——ベネルクス圏郭都市研究（2）——。人間文化研究科年報（奈良女子大学），13，1998（印刷中）。
- 2) 戸祭由美夫編：「ユーラシアにおける都市圏郭の成立と系譜に関する比較歴史地誌学的研究」<文部省科研報告書>，1998。のなかの論文篇 No.10「オランダの圏郭都市プランとその変容——日本の五稜郭の源流を求めて——」にオランダ圏郭都市に関する前稿の補訂を再録し，さらに図録篇の2ヶ所にオランダの計画的圏郭集落ウィレムスタットに関する新稿を収録した。
- 3) ベルギー国土地理院発行の1993年1月付け地図カタログによれば古地図16種類（他にブリュッセルの都市図6種），同じく1995年1月付の地図カタログによれば古地図10種類（他にブリュッセルの都市図1種）が販売されている。
- 4) ベルギー生まれのピレンヌ Henri Pirenne (1862~1932) はヨーロッパ史，とりわけ中世史の権威で，本稿に関係する著作としては下記のもの挙げられる。
"Histoire de Belgique" (全7巻) 1902~32, (増補4巻) 1948~50.
"Les villes du moyen âge. Essai d'histoire économique et sociale" 1927, Bruxelles. 佐々木克己訳：『中世都市—社会経済史的試論—』創文社（歴史学叢書）1970，323頁。
佐々木克己訳：『中世都市論集』創文社（歴史学叢書）1988，224頁。（1893~1905年の間に雑誌に掲載された3つの論文を訳出）
また，ピレンヌ自身に関して次の邦書がある。
佐々木克己：『歴史家アンリ・ピレンヌの生涯』創文社，1981，460頁。
- 5) ここに挙げたのはフランス語版で，全4冊のうち，第1巻と第2巻がフランス語圏（ワロニー）とブリュッセル，第3巻と第4巻がオランダ語圏（フランドル）に当てられている。オランダ語版は，次のような書名で，第1巻と第2巻がオランダ語圏（フラーンデレン）とブリュッセル，第3巻と第4巻がフランス語圏（ワロニー）に当てられている。
"Gemeenten van België——Geschiedkundig en administratief- geografisch woordenboek". 1981, Gemeentekrediet.
- 6) このカラー都市図の複製が，オランダの Canaletto社より "De stadsplattegronden van Jacob van Deventer" と題して刊行中であるが，ベルギーの分（第9巻・第10巻）は未刊。なお，このカラー都市図に関しては，前稿を参照のこと。

- 7) 資料B・資料Cはボカシを用い、資料Dはケバを用い、資料Eは等高線を用いている。
なお、これらの地図類のウィーン保管分については、日本地理学会1995年度秋季大会の地籍図類による景観復原研究グループの研究集会において、「18・19世紀ハプスブルグ帝政下の地図事業と地籍図」と題する発表の中で川村博忠氏が紹介された。
- 8) 空中写真測量にはカラーの空中写真が撮影・使用されているはずであるが、日本の場合と違い、市販の空中写真はモノクロのみである。この点でオランダと同じである。
- 9) ベルギーの地名のカタカナ表記にあたっては、ベルギーが言語文化の点でオランダ語・フランス語・ドイツ語の3言語地域に分かれることから（第3章第1節参照）、その地名の属する言語地域の表記・発音に拠ることとした。
- 10) ベルギーの自然環境に関しては下記のものを適宜参照した。
"Wolters' Algemene Wereldatlas / Leuven"
M.Goossens監修："Algemene aarderijkskunde 6" Pelckmans, 1989, pp.59~104. (ベルギーの学校地理教科書)
木内信蔵編：『世界地理7 ヨーロッパ』朝倉書店, 1977, 284~288頁 (谷岡武雄執筆)。この書では、F.Dussart et R.Contreras(1955)による4区分説 (北部平野, 中部丘陵, アルデンヌ高地, ルクセンブルク・ケスタ) を紹介している。
C.エムブレトン編著, 大矢雅彦・坂幸恭監訳：『ヨーロッパの地形 (上)』大明堂, 1997, 202~206頁・301~304頁. (原題："Geomorphology of Europe")
- 11) この節におけるベルギーの歴史的な面の記述は、次の2文献を参考にした。
今来陸郎編：『中欧史 (新版)』(世界各国史 7) 山川出版社, 1971, 387~456頁・巻末年表20~25頁。
栗原福也：『ベネルクス現代史』(世界現代史 21) 山川出版社, 1982, 369頁。
- 12) 現在ではオランダ語がフランス語と並んでベルギーの公用語として使用されている。正式の国名も、Koninkrijk Belgieというオランダ語表記と、Royaume de Belgique というフランス語表記が併存し、首都のブリュッセルも Brussel, Bruxellesの2表記が通用している。
- 13) この節の記述は、H.ピレンヌの邦訳書や文献A (E.A.Gutkind) に主として依拠した。(ただ、文献Aのベルギー都市史概説部分はピレンヌの著作物に依拠するところ大)
なお、ベルギーの都市史に関しては、下記のa)・b)の2文献で概観されているほか、西ヨーロッパの歴史地理に関する標準的著作であるc)・d)でも触れられている。
a) D.Vanneste: Site en situation van de Belgische steden. in "De Belgische stad van vandaag : waarheen?" Gemeentekrediet, 1985, pp.21~40.
b) "Geografie van België" Gemeentekrediet, 1992, pp.428~446(H. van der Haegen執筆の「De steden」の章<pp.427~482>の一部)。
c) R.E.Dickinson: "The west European city" (2nd ed.) Routledge & Kegan Paul Ltd, 1961, pp.142~160, 359~367など。
d) C.T.Smith: "An historical geography of western Europe before 1800" Longman, 1967, pp.369~400, 551~556など。
- 14) 当時の城砦の構造については、例えば次の書が参考になろう。
「ビジュアル博物館 城」(Christopher Cravett著, 日本語版監修: 森岡敬一郎) 同朋舎出版, 1994, 64頁。(特に8~11頁。)
- 15) この間の歴史に関しては、注11に挙げた概説書の他、ブルゴーニュ公国の興亡を扱ったJ.ホイジンガの名著や、ベルギー育ちで16世紀前半にハプスブルク家の最盛期を体現したカール5世の伝記を参照されたい。
J.ホイジンガ：『中世の秋』(堀越孝一訳, 堀米庸三解説) 中央公論社<世界の名著55>, 1967, 598頁。(J.Huizinga: "Herfsttij der middeleeuwen" 1919)
江村洋：『カール五世—中世ヨーロッパ最後の栄光』東京書籍, 1992年, 356頁。
- 16) この都市図帳は、1572年に "Civitas Orbis Terrarum" の名で刊行され、好評を得たために、第6巻

(1617年)まで編集・刊行された。各巻の名称は統一されておらず、原図の作成年代・作者・由来もさまざまであるが、一般にブラウンG. BrownとホーヘンベルフF. Hogenbergの2名を共編者として表示する。その体裁は、ヨーロッパを主に世界各地の都市が、平面図的鳥瞰図・俯瞰的鳥瞰図・立面図の何れかの表現法によって描かれ、ラテン語の解説文が都市ごとに添えられている。第1巻と第2巻では立面図の比率が高かったが、第3巻以降はほとんど平面図的鳥瞰図が用いられ、しかも既に立面図ないし俯瞰的鳥瞰図が再録されている都市の場合、さらに平面図的鳥瞰図が追加採録されることが多かった。例えば本稿の対象とするベルギーの場合、第1巻に8都市が収録されているが、平面図的鳥瞰図3(ブリュッセル・ヘント・ブルッヘ)・俯瞰的鳥瞰図1(アントウェルペン)・立面図4(リエージュ・モンス・ルーヴェン・メヘレン)で、そのためアントウェルペン・モンス・ルーヴェン・メヘレンの4都市の平面図的鳥瞰図が第3巻以降に載せられている。詳しくは、下記の復刻本の解説を参照されたい。

『16世紀世界都市図集成』2巻本(別冊解説<R.A. Skelton著、長谷川孝治訳>)。柏書房、1994年。
 『Beschreibung und Contrafactur der vornembster Stat der Welt』<解説:M. Schefold>, Verlag Muller und Schindler, 1965-70.

- 17) 資料Aのうち、Canaletto社より刊行中の複製セットはベルギーの分が未刊なので、ベルギー国土地理院より購入済みの5都市分しか検討できないが、その5都市(ブリュッヘ・コルトレイク Kortrijk・マリアンブール・メヘレン・ニューポールト)では全て囲郭を備えている。
- 18) イタリア北東部のパルマノヴァPalma Novaに代表されるようなシンメトリックな形態をもつ。なお、当時のネーデルランドにおける都市囲郭・要塞設備に関しては、前稿第3章第2節およびその依拠文献たる下記の書を参照のこと。
 G.L. Burke: 『The making of Dutch towns - A study in urban development from the tenth to the seventeenth centuries』. 1956, pp.117~124, Cleaver-Hume Press Ltd, London.
- 19) この資料Cの「オーストリア領ネーデルランドの地誌図」セットは全25枚からなっているが、中には、凡例(No.1)、この地図セットをオーストリア皇帝へ献呈する場面の図(No.16)、ブリュッセル都市図(No.21)、ベルギー全図(No.22)が含まれている。割り図21枚も、現在のベルギー国土よりいくぶん広い範囲をカバーしていて、106×75cmという基本の大きさよりも幅の狭い図幅もかなりある。
- 20) 集落に関するこれらの区分のほか、教会関係の建物に関して詳しい記号表示をしている。このことは、ベルギーの社会・文化におけるカトリック教会の重要性を象徴しているばかりでなく、集落景観において教会関係建物がランドマークとしての役割も担っていることを物語っている。なお、資料Cの地名表記・凡例・解説文などで用いられているのはフランス語で、a)~f)の原表記は、a) Ville Fortifiee b) Ville Muree c) Bourg d) Fort e) Grand Village f) Village である。
- 21) 資料Bの複製の発売元たるベルギー国土地理院の古地図カタログによれば、これは当初は手書きでわずかに3部作成されたのみであったが、ベルギー全体を対象に詳細な内容を盛り込んだ地図の最初として、その後の地図作成の基礎の役割を果たした、という。なお、資料B・Cともその原図作成責任者は將軍のフェラリFerraris伯である。
- 22) 1180年に、ブリュッヘに通じる水路に設けられた水門(ダム)の地に成立し、その外港として栄えた。15世紀にズヴィン湾が埋まって後はその重要性を大きく減じたが、かつての航路は運河化されて残り、1615年から1716年までの約百年間は2重の囲郭を施された要塞として機能した。資料B・資料Cにみるダムの囲郭はその名残りで、現在もその周濠が部分的に残っている。
- 23) 例えば、ベルギーの国土防衛拠点とされたアントウェルペンなど。
- 24) ブリュッヘについては、ベネルクスの中世都市の典型であるため、H.ピレンヌの著作(注4)や文献A(pp.374~386など)でたびたび言及されているほか、注13のR.E. Dickinson(pp.362~364)やC.T. Smith(pp.385~388)でも触れられている。しかし、「ベルギー諸都市の歴史地図帳」というシリーズの第2冊目にあたる下記の書は、「都市ブリュッヘの発生から現在までの発達史」(pp.9~158)と「都市景観におけるランドマーク」(pp.159~229)の2部からなり、豊富かつ多彩な地図・絵画類を用いてブリュッヘの都市史を明らかにしており、出色の内容である。ブリュッヘの都市囲郭の変遷を扱った本稿の記述の箇所は、本書所載の地図類を根拠としている。

- M. Ryckaert : "Historische Stedenatlas van Belgie Brugge" 1991, Gemeentekrediet, 239p.
- 25) ズヴィン湾は、北海の水がスロイスSluis (オランダのゼーラント州の南西、ベルギーとの国境に位置する) 付近から南西方向に入り込んで生まれ、ブリュッヘにとって一方では、洪水の被害をもたらす恐れもあった。そのため、湾からブリュッヘに至る間で堤防が補強されるとともに、水門を備えた外港としてダム (12世紀後半)・スロイス (13世紀末) といった町が新たに生まれた。ダム・スロイスという地名自体が、ともにその機能——堰、水門——に由来する。なおダムについては、図4および注22参照のこと。
- 26) ルーヴェンについては下記の観光案内書がでていて、便利である。
M. Derez : "Leuven" Lannoo en Universitaire Pers Leuven, 1991, 96p. (英語版 "Wonderful Leuven")
- 27) 第1巻では横長のいくぶん俯視気味の立面図 (No.19), 第3巻ではデヴェンテル都市図に依拠した平面図的鳥瞰図 (No.11)。第3巻の図とデヴェンテル都市図との最大の相違は、前者が宅地以外の農耕地などについても区画と土地利用を丁寧に描いている点にある。
- 28) 1977年に、旧市域の周辺の自治体を合併して人口は約3倍の8万人台に増加した。また、ルーヴェンを大学町たらしめているルーヴェン・カトリック大学でも、1970年にワロン系が分離してルーヴァン=ラヌーヴ (Louvain-la-Neuve) へ移転・独立し、残ったフラマン系の中でも医学部門は西郊 (Campus Gasthuisberg) に、理工学部門は南郊 (Campus Arenberg) に移転した。なお、ルーヴェン・カトリック大学の図書館が大戦による被害をどう克服してきたかについて記した本が邦訳されている。
W. シヴェルブシュ (福本美憲訳) : 『図書館炎上——二つの世界大戦とルーヴァン大学図書館』法政大学出版社 (叢書・ユニベルシタス 385), 1992, 274頁。
- 29) a) ムーズ河谷部, b) 古生層の各種累層が東北東～西南西方向に走るムーズ川本流～ザンプル川沿い河谷およびその南部のアルデンヌ高原前地 (コンドロズ山塊とファーニュ・ファメンヌ盆地), c) デヴォン紀層からなるアルデンヌ高原, d) 中生層からなるロレーヌ・ケスタ地域。
- 30) ここはオランダ語使用地域に隣接し、かつリエージュ州の東端にドイツ語使用地域があるため、フランス語のリエージュ Liège という表記のほか、Luik (オランダ語)・Lüttich (ドイツ語) もよく併記される。
- 31) ブラウン=ホーヘンベルフ都市図帳の第1巻 (1572年刊) に収録された俯視的鳥瞰図 (No.13), およびメリアン M. Meerian による1640年の俯視的鳥瞰図 (文献A, 図311に拠る)。但し後者は、矢守一彦 : 『都市図の歴史 世界編』 (1975年, 講談社, 202~203頁) に依れば、アンゲリウス『ハンザ諸都市ヴェルデン=ハーゲン』 (1631年刊) の復刻版であろう。
- 32) 当時、西ヨーロッパでカール5世と対立関係にあったフランス王フランソワ1世の妃エレオノーレは、カール5世の2歳上、マリアの7歳上の姉にあたる。(注15の江村洋の著書参照)
- 33) 当時の理想都市については、日本語による単行本として次のものがある。
中嶋和郎 : 『ルネサンス理想都市』講談社選書メチエ77, 1996, 244頁。
- 34) 文献A (p.462) に下記の都市図集からマリアンブールの図が載せられている。
Joan Blaeu : "Toonneel der Steden van de Vereenighde Nederlanden", 1649.
しかし、筆者が閲覧したオランダ語版の復刻版 (大阪大学文学部所蔵) には当時のオランダ国内の都市の図しか収録されていない。あるいはラテン語版にマリアンブールの図も収録されているのかもしれない。古地図の専門家のご教示を待つ。
また、同じく文献A (pp.462~463) にマリアンブールの正方形の旧市街地を南南東方向から写した斜め空中写真が掲載されているので、参照されたい。
- 35) マリアンブールと同様、同州のアルデンヌ県フィリップヴィル郡に属する。
- 36) "Tutti i Paesi Bassi" Anvers, 1588. の中の都市図 (文献Bのp.1194に拠る)
なお、フィリップヴィルに関しては、デヴェンテル都市図は作成されていない (図2参照)。

Preliminary Note on the Castle Towns in Belgium

TOMATSURI Yumio

The author has studied some types of Japanese castle towns constructed in the early modern ages. A specific type attracted him very much. It is a castle with wall, moat and bastions such as Goryōkaku in the south end of Hokkaidō. Its plan is thought to be brought from west Europe through Dutch military books.

So, in his paper "Preliminary note on the castle towns in the Netherlands"¹⁾ he tried to examine the history of castle towns in the Netherlands and to clear up the features of four typical castle towns by showing various maps and photos.

In this paper, he tried to examine the history of castle towns in Belgium, using research papers, various old maps, topographical maps, air-photographs. Then, the following five facts are pointed.

(1) According to 'Carte Chorographique des Pay-bas Austrichiens' (1780) fortified towns were located more closely along the border with Zeeland Province of the Netherlands and with France than in other part of Belgium.

(2) In the northwestern part of Belgium covered with swampy lowlands, after fortified towns were dismantled most of their moats have remained as useful canals, such as in Bruges (Brugge), Province of West Flanders.

(3) In the central part of Belgium covered with gently undulated plain, town's moats were generally filled up to construct motorway rings after dismantlement of fortifications, such as in Louvain (Leuven), Province of Brabant.

(4) In the valley of Muse, town walls and moats were disappeared earlier than other parts of Belgium, and only bastions or forts have remained on the top of hills, such as in Liège, Province of Liège.

(5) In the Ardene Highlands, planned fortress towns constructed in the middle of the sixteenth century have remained keeping their original shapes because they are located far from urban areas, such as Mariembourg and Philippeville, Province of Namur.

1) Its part 1 was published in "Annual reports of Graduate School of Human Culture (Nara Women's University)" vol.12, 1997.

Its part 2 is now in printing in the same report, vol.13.